



# 発刊の言葉

今年も多数の皆様から投稿を頂き、《戦時体験記録集》第十四集を発刊することができました。厚く御礼申し上げます。

折しも五月十四日、憲法改正のための「国民投票法」が成立し、三年後には<sup>施行</sup>行されることになりました。予定通り進めば、その翌年には投票が行われ、今の中学二〜三年生の年代から投票に参加することになります。

本戦時体験記録集は体験者から体験談を広く公募し、戦争を知らない年代へ残る文字として引き継いで頂く《平和の文集》と願っております。戦争体験者は年毎に減少し『語り継がなければ』ならなくなっていますが、当語り継ぐ集いは、平和を願う人達のご協力を頂き、平成十四年から中学生諸君が祖父母達に当たる高齢者の戦争体験を『語り』『文字』にし発表して頂いております。

この小さな冊子があなた様を通して、平和のために役立ちますように。

## 目次

スターリンへの感謝文を読む前に	橋詰 四郎	一頁
スターリン大元帥へおくる感謝文	増田 金綱	三頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・松本 拓磨	十一頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・塩野 有加	十三頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・花井 玲菜	十五頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・寺澤 光姫	十六頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・杉田 大知	十八頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・加納 孝仁	二十頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・高木 宏明	二十一頁
祖父母達の太平洋戦争	中学二年・山田 泰豊	二十七頁
恐ろしかった戦争 孫達へ	森村 匡伺	二十九頁
中学二年生の日記より	藤井 明男	三十頁
戦争について	井戸 久子	三十二頁
空襲下交換台を守った女性達	緒川 文子	三十五頁
激動の少年時代	小寺 秀男	三十六頁
軍隊五ヶ月捕虜三年	吉田 勇雄	三十九頁
私の青春	伊藤 万平	四十頁
雪に埋もれた怨念	木内 久澄	四十二頁
男狩り	若尾 和延	四十三頁

# スターリンへの感謝文を読む前に

橋詰 四郎

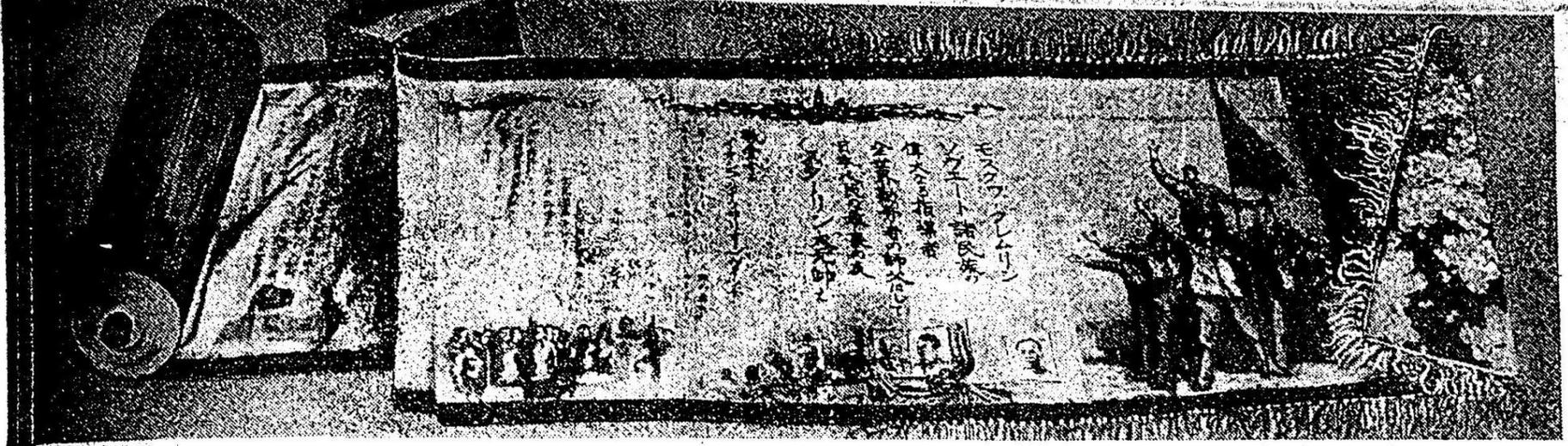
昭和20年(1945)8月8日、ソ連は日本に対し「日ソ不可侵条約」を破棄し明9日攻撃すると宣戦布告し、海外に居た日本人の41%。76万人の日本軍が駐留し、270万人の邦人が居住していた千島・樺太・朝鮮半島・満洲・蒙古に侵攻、宣戦布告を知らぬ日本軍は「国際法違反」だと応戦し、天皇は15日ラジオで全世界に向け「負け」を宣言した。

戦争が終るとソ連は、軍人は捕虜、一般男子は「男狩り」し、労働力とし強制連行。タイガーと呼ぶ森林を切り開き第二シベリア鉄道、バム鉄道建設では、宿舎もなく立木を伐採し小屋造りから始め、枕木一本捕虜一人の生命と過酷な非人間的な労働を強要した。非人間的な強制労働地は、東はカムチャツカ半島、西はモスクワ、レニングラード(サンクトペテルブルク)、ウクライナ、キエフ、南はパミール高原、北はエニセイ河下流の北極圏(北緯66度33分以北)、更に蒙古とソ連全土で、収容も不備な監獄棟など千八百余カ所へ押込み、背後から銃で狙い、戦後復興のために労働を強制させられた日本人は、80万人以上とも言われている。世界が日本がソ連が平和になつてから始まったソ連抑留と、満州邦人棄民扱いは、広島・長崎に継ぐ悲劇と私は位置付けしている。

夏服の日本人に、世界一の寒冷地は秋がなく九月に雪が降り、酷寒・飢餓・重労働・疫病が直ぐ襲いかかり、最初の冬は大勢が死ぬも死亡者名簿作成を禁じ、記録は死者ゼロ。翌年3月ソ連は、働けない病弱者と国際法に抵触する18歳未満者を日本でなく満州、北部朝鮮へ追放し「黒河」に追放された日本人は6月中共軍の番兵を殺し集団脱走、半数が捕まり銃殺された事件も発生。

ソ連は侵攻した地から撤退するとき、捕虜に新聞発行設備も略奪させ、連行した日本人を「共産主義者」に洗脳さす『日本新聞』を、治安維持法で逮捕され軍籍へ移された捕虜を編集に据え。昭和24年(1949)10月の650号迄発行した。日本新聞は「労働者・農民の諸君!」「同志諸君!」「同感、異議なし!」「反動は帰国させるな!」「吊るしあげろ!」「スターリン大元帥陛下万歳!」「資本家・地主を打倒せよ!」「天皇島へ上陸だ!」「代々木へ直行せよ!」とアジリ、転向者は優先帰国の噂で急速に広がり増え『シベリア天皇』まで出現する。オルグ(転向への勧誘者)アクチブ(活動分子)を送り込み、日本人が日本人を罵り痛め付け吊るし上げ、発狂自殺すると「白樺の肥やしが出来た」と、冷笑した。私は吊るし上げ覚悟で「大元帥は天皇一人で懲りたお断り」と、スターリン崇拜を拒否し24時間闘争の餌食にされる。方は順番を決め交代で私を寝かさない睡眠妨害。転向組は遂に「シベリア抑留と強制労働を感謝して」スターリン大元帥陛下に感謝文贈呈と発展する。

ソ連は帰国に際し印刷物を含む紙類の持出しを禁じ、発覚者は帰国させず25年の強制労働刑にした。感謝文全文(案)は関東軍第六国境守備隊歩兵10中隊重機関銃手、増田金綱(吹田市)が、80万日本人の上に君臨したシベリア天皇達の作成した「感謝文案」を狂気の証しと『死』を覚悟して隠し昭和24年(1949)9月24日、日本に持ち帰り、増田と同中隊擲弾筒手、橋詰四郎(豊明市)が手書きを活字に読み易くしたのである。遺族へ言葉で伝えた者達もいた。※紙は持てず、遺言書を手分けし記憶し、遺族へ言葉で伝えた者達もいた。



日本人捕虜を共産党に洗脳した日本新聞（朝日新聞＝復刻版）豊明図書館蔵書よりコピー  
 上段は感謝文絶賛記事 日本新聞1号 1945(昭20)年9月15日発行～1949(昭24)年10月20日 650号で終る

◇ 写真説明  
 感謝文は真紅の布地台で白布へ金糸で刺繍した豪華版、長さ30メートルの巻物作。1949年8月スターリンに贈られ、モスクワ国立中央図書館に現存。

◇ 舞鶴への引揚げ。  
 第一船 昭和20年(1945)10月7日、釜山から2100人、雲仙丸。(雲仙丸事件)  
 ◇ 舞鶴へソ連から引揚げ開始。第一船 昭和21年(1946)12月8日、ナホトカから2555人、大久丸が最初。  
 ◇ 昭和25年(1950)5月13日迄に221隻444,639人が引揚げてから中断続く。心配していると、一年後の昭和26年(1951)4月突然ソ連日本人引揚げ終了宣言。国交のない政府無抵抗。橋詰等徒党を組みソ連に猛反撃「俺等をも一度ソ連へ連れて行け、何処で強制労働をさせられているか教えてやる」と粘り強く抗議し、5年後の昭和30年(1955)4月18日、引揚げ再開され、昭和33年(1958)9月ホルムスクからの白山丸で終了。

◇ 51年後の平成9年(1997)3月25日。敗戦時平壤でソ連の男狩りで連行された邦人蜂谷弥三郎帰国する。まだ居るかも

◇ 平成3年(1991)ゴルバチョフ大統領来日。日本人の死亡者名簿を持参し、モンゴルの1596人を除くソ連領内は38,388人と発表。私は新聞を通して「見事な嘘の三八(サンパチ数字」と反論し、後年、日ソ間で話し合い五万五千人を死亡確定数にしてしまう。80万人以上連行し、7万人以上死んでいるのに。

本人に関係なく否応なしにパソコンと関わる時代

私は技術も知力もワープロ止まり、私にパソコンは難度無限未知数の世界で人様の領分であり、無縁だと思っていたパソコンに、私が登場させられていると茨城県甥Aと香港甥Bから教えられた。

甥A＝へら鮎釣りが雨で流れ退屈なので、なんとなく叔父さんの名を入れたらびっくりしました、いろいろ叔父さんが出てくるので、俳句も加えたら俳句でも出てきました。退屈どころか驚嘆な日でした。と。

甥B＝第一回アロイジオ賞に選ばれたとパソコンで知りました。おめでとくと香港から電話を頂きました。

そこで、娘や孫に検索を頼んだら、私の言葉を代弁者の如く利用している人がいることが判り、私の住所・年齢・名前を出し、執筆者は名乗らないのです。そんなのアリかと。これがパソコンの世界らしいのです。二、三例を下段に。

\* 週年度の授業に関する自己点検評価の書類を作成するノルマがある。ノルマと言えば、愛知県の橋詰四郎氏77歳がノルマは抑留日本人(60～70万人)を苦しめたロシア語で、日本に定着させたとある。普段、気楽に使っていた言葉には、厳しい労役や飢餓、死に代表される抑留体験である。生活の中に拭い去れない戦争が刻印されているのを理解することができ、「愛国心」「美しい国」をいう前に、「ノルマ」という言葉からしっかり見詰めよ。そうすることで、安倍新政権を対比して見る視座を・・・

\* 「ぬかるむ地に土下座した母」豊明市 橋詰四郎 79歳 朝日新聞  
「声」皇室記事では先導的な役割を果たす朝日新聞が、こうした投書を掲載する編集部が残存しているうちに・・・。

\* 文化に～全・日・遊・連 パチンコ福祉応援賞。\* 定年再出発・・・。  
\* プッシュへの手紙・・・。などなど孫が「おじいちゃん有料もあるよ、どうする？」俺が金儲けに利用されているのかなあ。もう判らん・・・。

- ★1971年NPOミニ里親会設立
- ★1987年からミニ里親会潮干狩り 三河国定公園東幡豆海岸
- ★1989年から戦争体験を語り継ぐ集い 緑区生涯学習センター 戦時体験記録集発行
- 2001年から中学生が調べた「祖父母達の太平洋戦争」語部中学生で発表
- ★1991年からミニ里親会お年玉チャリティコンサート みそのラフアエル幼稚園
- ★障害者も参加「通信式俳句会」毎月発行 平成19年6月号で454号

年度	チャリティコンサート入場者数				収益金の行った先		戦争体験記録集の発行
	ミニ里親会 当日観 望者	当 日観 望者	継続 入場者	観望 者数	贈り物の送呈 その他の寄付先	発行 日	
87年							集い 戦時体験 集い 戦時体験 集い 戦時体験
88年							発行 戦時体験 集い 戦時体験
89年							発行 戦時体験 集い 戦時体験
90年							発行 戦時体験 集い 戦時体験
91年	40	115	280	102	382	100,000	雨天中止 8月2日
92年	7	32	81	108	228	38,000	47人 5/17 8月09日 発行
93年	0	70	89	151	310	100,000	47人 6/25 8月2日
94年	81	46	82	209	360	100,000	91人 6/11 8月07日 発行
95年	0	23	43	66	186	0	71人 5/03 7月16日 発行
96年	53	70	62	185	317	100,000	65人 5/06 7月13日 発行
97年	0	128	61	189	344	0	69人 5/25 7月19日 発行
						20,229 (日本海誠会へ)	
						22,508 (大地の子へ)	
98年	0	91	43	134	275	91,817	雨天中止 7月11日 発行
99年	15	73	50	138	276	81,443	62人 5/02 7月10日 発行
00年	33	103	93	229	364	162,696	58人 5/04 7月08日 発行
01年	30	101	48	179	320	153,521	90人 6/09 7月14日 発行
02年	22	90	42	154	287	119,412	62人 6/15 7月13日 発行
03年	10	85	63	158	286	98,790	72人 5/17 7月12日 発行
04年	10	65	58	133	249	82,322	88人 6/05 7月10日 発行
05年	34	68	36	138	298	135,535	61人 6/12 7月09日 発行
06年	20	62	59	141	269	100,000	88人 5/28 7月08日 発行
07年	35	88	57	180	336	100,000	85人 5/19 7月28日 発行

来年1月13日第18回ミニ里親会お年玉チャリティコンサートです

2004年6月	井上ひさし等9氏《9条の会創立》'07/1/31日現在全国6020愛知297豊明2
とよあけ9条の会発足講演会	2005年09月17日 田巻紘子 弁護士 弁護士 イラク派兵阻止訴訟弁護団員
とよあけ9条の会勉強講演会	2006年04月22日 小林 武 法学博士 愛知大学法科大学院憲法学教授
とよあけ9条の会勉強講演会	2006年11月18日 本 秀紀 法学博士 名古屋大学大学院法学部教授
とよあけ9条の会勉強講演会	2007年03月17日 近藤 真 法学博士 岐阜大学地域科学部教授 (憲法学)
とよあけ9条の会講演準備中	2007年10月28日 三上 満 元中学教師《ドラマ 金八先生のモデル》
とよあけ9条の会、07年4月21日現在	呼びかけ人100名賛同者380名署名数648筆

- 2007年5月19日(土)ミニ里親会潮干狩り 85人参加
- 2007年7月15日(日)SVP日本全国大会 講演(人間の尊厳) 南山学園研修センター
- 2007年7月28日(土)戦争体験を語り継ぐ集い

★「我国に於ける児童福祉」を卒業論文に選んだら、教授から「橋詰四郎」を書けといわれたので会って下さいと電話。教授も生徒も面識のない知らぬ人です。4大を卒業し今春幼稚園に奉職。橋詰、本人の知らない処で活躍しています。

# スターリン大元帥え

おくる感謝文（草案）

モスクワ・クレムリン  
ソヴェート諸民族の偉大なる指導者  
全世界勤労者の師父にして  
日本人の最良の友  
スターリン大元帥え

敬愛するイオシフ・ヴィツサリオノ・ヴィツチ！

旧日本軍捕虜である私達は、人類の最大の天才、全世界勤労者の導きの星であるあなたに、そして、あなたを通じソヴェート政府並びに、ソヴェート人民に偉大なるソヴェートの国が、私達に与えられた光と喜びに対し、私達の心からの感謝と厚き感激をこめて、この手紙を送ります。

あなたの配慮のもとに、そしてあなたの教え子に、あなたの愛子であるソヴェート市民、ソヴェート軍将兵の指導のもとに、ソヴェートの地に送った四年の生活こそ、私達にとって偉大なる民主主義の学校となったのであります。それは私達にとって終生忘れぬ感銘として残るでありませう。

★  
さりながら私達日本の勤労者はあまりにも長い間、真実と自由の光から三重、三重もの厚き壁によって閉ざされ、地主・資本家どもの眉目の奴隷となつて来ました。半世紀以上の永きにわたり、強盗的日本帝国主義は極悪非道の「極東の憲兵」として、隣接諸民族を掠奪し、桎梏下におき、一再ならず、ソヴェート極東領土への侵攻を企ててきたのであります。さらに、かかる貧欲あくなき日本の帝国主義者どもは、隣接諸民族への圧制と共に、貴が愛する祖国に対しても残忍極まりなき警察的テロルを敷き、血まみれの搾取制度を打ち立ててきました。そして、私達こそ天皇制軍事警察政治のもと、非人間的搾取と貧困、汚辱と闇黒に喘ぎつつも、その盲目の奴隷的兵士として踊つてきたのであります。わが美しき祖国、七千万の勤労を愛する人民をもち、富士の美しさを誇つた吾が国土も、それは掠奪戦争によって世界制覇の野望と妄想を企ててきた天皇とその一味、野獸的軍国主義者どものものでありまして、偉大なるソヴェート人民並びにその勝利に輝く武装力のみが、ファシスト、ドイツと日本帝国主義強盗軍を粉碎し、かくして全世界、諸民族をファシスト奴隷化より救つたのであります。ソヴェート軍は吾が人民をも含め、全世界民族の前に民主主義的原則の上に立つ新しき、幸福な生活を建設する、いまだかつてなき可能性を切り開いたのでした。かくてソヴェート軍は吾が日本人民を強盗的戦争の無益な犠牲と惨害から救い、さらに私たちに取つても民主的発展の途にたち上る機会を与えられたのであります。

一九四五年九月、私達はソヴェート同盟の捕虜収容所えたどりつきました。しかしながら、その当時の私達は反動の手先どもによって、私達の行くシベリアは「荒涼たる氷雪以外に何も無し」と教えこまされ、しかも、そこには恐るべき「酷使」と「死」が待つてあるうと思ひ込まれてきたのであります。

だが、ソヴェート同盟において、私達を待つていたものは、これら反動の手先どもの戯言とは似てもつかぬ事実であったのであります。ソヴェート政府は何よりも第一に、私たち旧敵軍の兵士にさえ、厳正なる八時間労働制を与えら

れました。收容所当局の精力的活動と適切なる方策によって、ただちに、暖かき寝具と被服が整えられ、立派な宿舎が保証されました。私達は、シベリアでいかなる「荒涼たる氷雪」をも見出しえませんでした。私達の給与もまた、十分なカロリー計算のもとに、一点の汚れなき純白の調理場で、しかも日本料理風の創意を活かすべく細部にまで配慮された收容所当局の指導のもとに、私達の食膳を賑はせています。その上、私達は毎日の賃金と諸々の賞与を受取けり、收容所内には豊富な日用品、嗜好品をそなえたマガジンが開設され、更に最近では食事、菓子、飲物を備えたレストランまで開設されているのです。

下着もまた毎週清潔なものと交換され、立派な施設をもった入浴場、洗濯場が設けられています。私達の身体は毎月定期的にソヴェート医師の行きどいた健康診断を受けていまして、私達の收容所病院とその医療施設についていならば、それは日本の勤労者が夢にだに見ぬものでした。そこにはソヴェート医師の人道的献身と共に、いくたの高価な薬品、医療機、歯科施設にいたるまで備えられ、完全に治癒するまでの配慮が加えられているのでありまして、更にその上、私達の收容所には「休息の家」まで設けられています。そこではもっと美しく整え配慮された文化的環境のもとに誠実な勤労者が休息します。「病気でもない勤労者が休息する」実にこの様なことがいかなる資本主義の捕虜收容所に、いな資本主義諸国の勤労者、なかんづく吾が日本の勤労者の生活にさえ、有りうることでありましようか。

それ故、ソヴェート同盟に於ける私達の生活は如何にしても「捕虜生活」と呼ぶ事は出来ないのです。それは喜びに充ち、自由に溢れた不安なき生活であり、ソヴェートの人々との厚き友誼に結ばれた生活なのであります。このように私達の生活は、およそ「捕虜生活」「收容所生活」なる概念の通俗の意味からはまるで異なったものでありまして、そしてそれは、あなたの配慮にもとづく最近の物価引下げによつて、更に豊かに、更に楽しく向上しつつあるものでありまして、だが私達の生活は、かくの如く物質的に豊かであるというのみではありません。私達はクラブ、自立楽劇団をもっています。

私達のクラブ、そこには、幾多、日本語の新聞、書籍が積まれ勤労者としての私達が政治的、文化的教養を与えてくれます。ここで私達は自由に集会し自由にかつ、あらゆる問題について討論し、さらに娯楽をも楽しむことが出来るのです。自立楽劇団は私達の誇るべきものの一つであります。

管弦楽団をも加えたこの大楽劇団は、私達自身の創った音楽をもつて私達の生活を豊かにしています。私達は毎週ソヴェート映画をも楽しむ事が出来まして、すでに私達は忘れがたき感銘をもつて「ウラジミール・イリイチ・レーニン」「誓い」「シベリアの大地」「若き親衛隊」をはじめ、しかも、その中には日本語版の解説までつけられたソヴェート映画を鑑賞することが出来たのです。更に、私達は時おり、付近の市街を見学し、大劇場、映画館を訪れ、更に、学校、ピオネールの家、労働組合、工場、コルホーズの諸施設を見学することさえ出来たのでした。

## 敬愛する

イオシフ・ヴイツサリオノ・ヴイツチ！

私達は四年前の私達を振り返るとき、私たち自身みづからの巨大な変化に打たれるものです。在ソ四十年の間私達は、吾が日本に於ては幾十年いな、吾が日本に於て到底学び、かくして私達を激励したのであります。と。共に私達は政治、経済、文化に関する幾多の日本語の出版物、さらにゴルバードフの

「征服されぬ民」ブレレンコの「幸福」等のソヴェート文学にいたるまで受けとり、私達の図書室は尽きざる宝庫をもって満たされたのでした。就中、私達は、あなた自身の書かれた最大の著書「ソ同盟共産党（ボルシエヴィキ）歴史小教程」―レーニン主義の諸問題―「レーニンについて」等を受取り、これによって私達はマルスク、レーニン主義の偉大な思想を学ぶ事が出来たのであります。

かくて私達は、私達自身の政治的生活を自由に、かつ、私達全員の意志で最も民主主義的に建設すべき一切の可能性を得ました。最近私達は、私達の反ファシスト委員会創立一周年記念を祝ったのであります。反ファシスト委員会のもとに私達は、収容所生活の真の文化的、政治的自由を建設しました。それは永きファシスト軍隊の奴隷的屈辱にあえぎ、天皇制軍隊にあって、一片の人間としての権利さえ保証されなかった、無残な私達旧奴隷兵士にとって、いかに大きな歓びと解放の暁であったことでしょうか。奴隷的圧制に呻吟した無権利の旧日本軍将兵たりし、私達は社会主義の国ソヴェートの国で解放され、はじめて自由を得、民主主義を学び知ったのであります。そして、この様な私達の精神的な生活、文化的、政治的生活を貫き導いたものこそ、捕虜にさえ何らの人種的、民族的差別なき、高潔にして高邁ソヴェートの人道主義の偉大な力でありました。いまでは、私達の仲間の一人一人がソヴェートの勤労者との友誼に満ちた四カ年を、ソヴェート人民への敬愛をこめて忘れがたく思い出しているのです。私達はソヴェートの人々とともに過ごした生活を決して忘れ得ぬで有りましょう。ソヴェート勤労者との友誼的交歓に満ちた、吾が在ソ生活こそ私達の偉大な教訓、最大の感銘、貴重な民主主義の学校となったのであります。レーニン、スターリンの国、ソヴェートの国での四カ年、それを私達は心から敬愛と感激をもって日本の勤労者に語り伝えるであります。私達は収容所当局、ソヴェート軍将兵、工場、コルホーズの人々を想い起こしつつ、如何なる困難にもたじろかぬかの不撓不屈について社会主義祖国の隅々にまでも、漲る共産主義建設の力と歓喜について偉大なるソヴェート愛国主義と、解放者ソヴェート軍の素晴らしさについて、そして平和的、創造的勤労の榮譽、謙虚と素直、真の人間愛、高き文化的教養について深き感激に燃え、語り伝えるであります。

### 敬愛する

イオシフ・ヴィツサリオノ・ヴィツチ！

いまこそ私達は、ソヴェートの人々がファシスト・ドイツ並びに、帝国主義日本の撃滅のために、全人類の文明を救ふために流された、幾多の血と尊き犠牲、その英雄主義がいかに巨大なものであったかを知ったのです。全世界の誠実な人々はソヴェート人民の払われた犠牲と、ファシズムからの人類解放の歴史的偉業を、心から讃えているのであります。そしてまた、戦後ソヴェート同盟のたくましく国民経済復興発展に示された、ソヴェート人民の労働の偉業こそ、また真に英雄的事業なのであります。

あなたとボルシエヴィキ党の回りに固く集結したソヴェート人民が全進歩的人類の先頭に立ち民主主義、反帝国陣営の前衛として社会主義の基礎完成と共産主義社会への漸次的移行という、偉大な、かつ崇高な目的のために確信に燃え躍進しつつある事実、全世界勤労者は自己の未来の解放への勝利の確信を汲みとっているのであります。

「社会主義労働の英雄」これは何と素晴らしい人類の新たな言葉でありまし

ようか。広大なるソヴェート同盟の全土に平和的創造的労働の歓喜がわきたつています。労働がかくも栄誉であり尊敬され、勤労者が豊かな全権をもった国の主人として、かくも力に漲っている国を、そして全人民一枚岩の如く結集し、勤労がかくも素晴らしい成果をあげつつある国を、私達は夢想だにしえぬところでありました。一握りの売国的反動どもに支配されるわが日本が益々惨害に充ち、亡国的破局へと沈みつつあるとき、一方すでにソヴェート同盟では再度にわたり物価引下げがなされ、勤労者の生活状態は日如に目覚ましく向上しつつあるのです。この厳たる事実の内にこそ私達は社会主義制度の資本主義制度に勝る偉大な優越性を、そして、あなたの勤労者に対する慈父の如き配慮を、はつきりと見ているのであります。

シベリアの大地を變革する壮大な建設は、ソヴェート同盟全土の建設が如何に素晴らしく、巨大なものであるかを身をもって痛感せしめるものです。ソヴェート科学と技術とをもって高度に機械化された工場と建設事業、コルホーズ、社会主義都市と農場、そしてそこに、あなたをいたたくソヴェート憲法によって保証された勤労者が、華開くが如く睦まじい一家を建設しているのを私達は見ているのです。

私達日本の勤労者にとって、直接のそして最大の驚きと感銘は、ソヴェート諸民族の精神的政治的団結と友誼であり、更にソヴェート諸民族は、あなたの正しい民族政策によって如何なる民族的、人種的偏見も知らず、かくも解放されていくのです。少数民族そして、青年と婦人、児童それは日本の勤労者の暗たんたる運命によって、最大の惨めさと不幸とを象徴するものであります。だが、ソヴェート同盟に於てはソヴェート諸民族と婦人、青年と子供たちは何と確信に満ち歓びに燃え、大胆に未来へと進んでいることでしょうか。彼らは何と力に充ち幸福に輝き、如何に歓びの歌を唄って進んでいることでしょうか。ソヴェート人民の姿に勝る崇高な姿はありません。それは私達をして、資本主義国の人間とまさに前種の新らしき世界の高度な人間を感じさせるものです。

そして又、トラクタールとコンバイン並びに各種の先進的農業機械の驀進する電化されたソヴェート農場は、すべての日本人捕虜の驚異の眼をみはらしめたのでした。猫額の土地に加えて、地主的圧制下に永き貧困と闇黒に喘ぎ、巡査にさえ腰低く、朝は暗くから夜は星をいただきつつ、しかも供出と年貢、更に土地そのものを失うことにおびえる私達の故郷を思い浮かべる時。そして陽に青黒くやせ衰え、日照りに憂い、渇水に憂い、希望を失った忍従の宿命に救いをもった吾が日本の勤勉な農民を思うとき、ソヴェート農場の社会主義文化に輝く豊かな穀物に満ち溢れる、コルホーズは私達の心からの羨望を起さしめるのであります。

就中、あなたの名をいただき、あなたの創意によって決定された自然變革の壮大な計画は、いかに私達をして社会主義の無限の偉力、社会主義国家の偉大さに心から感歎せしめたことでありましょうか。それは吾が日本を含めての資本主義世界の腐朽と破局とを天地のひらきをもって、対比せしめるのみでなく、生き生きと来るべき共産主義社会の豊かさや幸福を胸深く確信せしめるものであります。

吾が民族の二五%、一千万の失業者とその家族が失業という資本主義の火の鞭に呻吟する日本、そしてただ一人の失業者さえなきソヴェート同盟、それだけでなくソヴェート同盟の勤労者は労働の権利、教育を受ける権利、休息の権利を保証され、すべての學術機関と文化宮殿、サナトリウムと完備された無

料の近代的医療機関を持ち、更に社会保険によって疾病と一時的労働能力喪失に対し、更に老後に対しても何らの不安もなき生活を保証されているのです。

### 敬愛する

イオシフ・ヴィサリオノ・ヴィツチ！

私達は、かくも繁栄するソヴェート社会の富と栄誉と文化とが勝利に輝くレニンの旗の元に、あなたの天才的指導の元にボルシエヴィキ党の指導のもとに闘いとられたものであることを知っています。偉大なる十月社会主義革命の光が、そしてレーニン、スターリン党の回りに固く結集した、ロシア労働階級と勤労人民が内外の反革命と、帝国主義強盗軍との激闘に未聞の英雄主義を発揮したればこそ、ソヴェート人民は社会主義を建設したものであり、されば又、それはソヴェート人民の幸福と歓喜とを一しお美しく、かつ崇高に飾るものであります。

偉大なる十月社会主義革命は、人類史に新たな時代を切り開きました。これは一切の人間による人間搾取を絶滅し、世界最初の労働者、農民の国家を打ち立て、そして一切の生産手段、生産用具の私有を廃止し、それを人民の所有に移し、かくして全経済を計画的に遂行する前提条件を創り出したのであります。それは、搾取と貧困、人間の不幸そのものに終止符を打ったのでした。マルクス、レーニン主義の偉大なる思想は、あなたとボルシエヴィキ党によってソヴェート同盟において実現されつつあるのです。永い間、人類の誠実な先進的な人々が夢見たそのことは、同志スターリン、あなたの指導によって、夢でなくソヴェート同盟の現実をもって実現されつつあるのです。ソヴェート人民はソヴェート全土に生活の歓びと未来への確信に燃える、躍動をもってレーニンの途に沿い今のレーニンである。あなたの指導のもとに共産主義の勝利へと進んでいるのです。そしてまた、私達日本の勤労者は「ソヴェート同盟で実現されたものはまた、他の国においても完全に実現しうるものである」との、あなたの言葉に励まされつつ勇躍、吾が日本の民主化の為に社会的、経済的改革の為に躍起せんとしているのであります。

### 敬愛する

イオシフ・ヴィサリオノ・ヴィツチ！

然しながら私達はいまや、その地盤が脚下にゆらぎつつある帝国主義反動どもが、戦後いまだ数年をえぬに再び新戦争を企て、しかも、まづ第一に全人類をファシスト地獄から救うために、その最良の息子と娘の尊い血を流して闘った英雄的ソヴェート同盟に、そして、ソヴェート軍の偉大な勝利によって生まれ、人民民主主義諸国に襲いかからんとしているのを知っています。それのみか、彼らは北大西洋協定なる策謀によって公然と、人類に刃向かう平和に抗し、かくてその極悪非道の犯罪的火遊びに、一そう深入りするにいたったのであります。私達は知っています……これこそアメリカ帝国主義共の世界制覇計画たることを、これこそ諸民族独立を踏みにじり、ウオール街のあくなき一群の狼どもの下に、そしてその奴僕たる売国政府の下に諸民族を奴隷化せんとするものであることを。

更に、又吾が日本に於ても、しかり吾が日本をこれら犯罪的陰謀の醜悪な戦略基地として、吾が人民を彼らの肉弾として吾が国を彼らの泥靴の下に、植民地奴隷と化さんとしつつあるのであります。私達は、いわゆる太平洋プロックの結成を断じて偶然と考えることはできません。このプロックの目的とすると

ころこそ、アメリカ帝国主義による諸民族の奴隷化、就中、日本人民の奴隷化であり、すでに彼らは吾が日本に「非日本活動調査委員会」なる形でその「ゲシュタポ」を作ったのであります。吾が愛する日本の独立は蹂躪されんとしています。あらゆる惨害をなめた日本人民の自由と平和、民主主義への希望は日本帝国主義の粉砕後といえども、実現されなかつたのみならず、アメリカ占領軍のもと更に耐えがたき屈辱と窮乏、破局に呻吟して居るのであります。わが民族の二五%を越える失業者の大群、戦前に数百倍する亡国インフレーションと飢え、農民生活の破滅と産業の荒廃そして日々、幾千の労働者は街頭に投げだされ、漸く職にありついた者に対しては植民地的低賃金が投げ与えられて居るのです。

吾が人民の希望であったポツダム宣言の非軍国化と民主化の約束は、いまやことごとく戯画化されたのみならず、吾が人民の人間としての初歩的民主的権利さえも奪い取られ、三十万警察軍の増強と売国ファシストのテロルが吾が人民の前衛、日本共産党と労働階級の最良の息子たちの頭上に荒れ狂っているのです。幾多の共産黨員、幾多の労働者、農民、進歩的インテリゲンチヤの最良の代表者達が、現にアメリカ占領軍の植民地、軍事裁判に引き摺り出され重労働十数年を課せられたのです。これこそが憎むべきアメリカ占領軍と売国支配層、さらにその走狗たる右翼社会党幹部一味のもたらした戦後四カ年の「贈物」なのであります。しかも吾が国の戦犯的売国的支配者共はかかる植民地的奴隷化計画を実施せんとする、アメリカ帝国主義者と密着することによって、公然と民主的構和を無限に遷延せんとし、かくて彼らの朽ち果てた生命を永らえんとしているのです。その為には彼らは吾が民族の独立をも吾が国の富を売り払うとも、そしてまた、わが国と人民をアメリカ帝国主義の戦略基地と肉弾に化すことをも辞さぬと、公言してははばからぬのです。かくして彼等はわが民族を再び惨、目をおおおう破滅へと導いて居るのであります。

しかしながら私達は、はつきりと知っています。……これら全ては歴史そのものによつて没落の宣告を受けた帝国主義どもにあえなき、あがきたることを、もはやその命脈尽き果てた資本主義のその余命を幾何たりとも永らえんとする狂乱たることを。

彼らは帝国主義強盗どもがいかに荒れ狂おうとも、断じて歴史の齒車を逆転しうるものではありません。全世界の人民は断じて帝国主義者共の奸計を許すものではありません。そして、もしも彼らが歴史の教訓学ばず、あえてその犯罪的陰謀を押し進めるならば、全世界の人民はあげて彼らの頭蓋を一撃のもとに粉砕せんとすの決意に燃えているのであります。

民主主義と社会主義の戦闘的前衛、強力なるソヴェート同盟こそ民主主義と社会主義の終局的勝利の保証でありまして、平和と安全同権にもとづく世界諸民族の国際的協力を目指す、社会主義ソヴェート同盟の対外政策こそ全世界人民の希望と決意をあらわすものであります。……いかなる侵略戦争も社会主義ソヴェートの国に全く縁がないのみか、ソヴェート同盟の平和的政策と諸民族友誼の政策こそ人類の最高の睿智と思想たる共産主義社会の建設を目指し、闘うソヴェート国家の本質そのものに由来することを、されば又、あらゆる大國のうち、ソヴェート同盟のみが吾が日本民主化と非軍国化、わが日本の勤労人民の利益と幸福とを守って計っているものであります。アメリカ占領軍と売国的反動のファシヨ的テロルの下、平和と民族独立の為の苦闘を続けるわが日本勤労人民にとつて、ポツダム宣言の厳正実施を目指すソヴェート同盟の雄姿は、如何に無限の勇氣と確信の源泉となつて居るのでありましようか。ソヴェー

ト同盟こそが全世界の勤労人民にとって、均しく日本人民の眞の頼むべき友なのであります。

### 敬愛する

イシオフ・ヴィツサリオノ・ヴィツチ!

現在の私達は、もはや過去の私達ではありません。私達は自から恥ずべき過去と、そして日本帝国主義反動とも永遠に縁を切りました。私達は民主主義と社会主義の陣営の一部であり、平和の軍隊の戦士であることに深く誇りをもっているのです。いまこそ、私達の担う神聖なる任務に平和と民族独立の為に、最後の血の一滴まで献げて闘う用意があります。私達はソヴェート人と、日本人民とのゆるぎなき友誼の為に自己献身的に闘うであります。なぜならばそのみが、わが人民の幸福、わが民族の独立と平和、自由と民主主義をもたらすからであります。

私は知っています、日本人民とソヴェート人民との根本的利益は完全に一致していることを、私達は、私達がこの目で見、かつ学んだソヴェートの国を平和的、創造的労働に湧きたつ社会主義の国を共産主義へと進む、ソヴェート同盟の眞実をわが日本のすみずみ迄、吾が日本の勤労者の一人一人にアメリカ帝国主義者と売国反動共とのありとあらゆる、反ソ・反共デマを打ち砕きつつ全日本に響き渡らすであります。

厳粛に私達は宣誓します。私達はアメリカ帝国主義のやからどもが私達を再び犯罪的、奴隷兵士と化すことを、もはや断じて許さぬであろうことを、社会主義の国に対し労働者と農民の国に対し、たとえ大地がはりさけるとも、二度と再び武器を取らぬとの、わが誓約に私達は永遠にそむかざることを。

◎そして、帝国主義者どもが歴史の教訓にこりることなく、平和擁護にたつ諸民族の意志に抗し、犯罪的冒険をあえて犯すならば、そして吾が日本をかかえる犯罪的戦線の戦術基地に、植民地奴隷化の兵站基地に化さんとするならば、私達は必ずや死をもおそれず決然と決起し、憎むべき帝国主義者共の醜悪なる頭蓋を打ち砕くべく起ち上がるであろうことを。

◎私達は宣誓します。私達は民主主義と社会主義の事業と平和の事業に全世界勤労者の兄弟的連帯性にたいし、あくまで忠誠を守りぬくであろうことを。

### 敬愛する

イシオフ・ヴィツサリオノ・ヴィツチ!

私達はいまや、何をなすべきかを知っています。私達は日本の民主的変革のために闘い、私達の運命を人民と固く結びつけました。私達は、

◎民主民族戦線の戦列のうちに、私達の戦闘部署を見出し、日本共産党の指導のもとに、日本の勤労者の幸福のために平和と民主主義、民族独立のために闘うであります。

### 敬愛する

イシオフ・ヴィツサリオノ・ヴィツチ!

◎私達は、あなたとソヴェート人民の前に、更に厳粛に宣誓せんとするものであります。私達のこの聖なる誓いを、わが瞳のごとく、わが魂のごとく守りぬき、断固としてそれを果たし抜くであろうことを。

私達は私達の人生における、最大の感銘に満ちた在ソ四カ年の生活を、わが

再生の宝とし、その懐かしき思い出を変えることなく、抱き続けるであります。ソヴェート人民共に送った年月の感銘に励まされ、クレムリン宮の星を仰ぎつつ、わが人民の自由と解放を目指し闘い進むであります。ソヴェート政府の盡力によって、私達日本人捕虜の帰国の日も近づいています。だが私達は断じて「祖国なつかし」をのみ帰るのではありません、無限の感慨をこめて、私達の歴史の地、私達の再生の地に別れを惜しみつつ、わが聖なる誓いを固く守り、わが人民解放の闘いに必要とあれば、わが生命を捧げんと確呼たる決意にもえ、進撃せんとするのであります。

私達は戦争の間は、はかりしれぬいくたの罪惡を、さらに在ソ間、幾多の負担をソヴェート市民におかけ致しました。然しながら、どうかマルクス、レーニン、スターリンの偉大な思想と、ソヴェート市民の崇高な人格の下に、かの醜惡な旧強盜兵士から、明るく歓喜に充ち未来への確信に充ち育っていった私達を寛容され、忘れることなく想い起されんことを。

私達は吾が日本に帰国したその時は、日本海の波濤遠く、レーニン、スターリンの国を仰ぎみつつ、ソヴェートの国の偉大な模範に無限の勇氣を汲みとりつつ、日本人民の利益のために全世界勤労者の自由と幸福のために。果敢に獻身的に闘うであります。

社会主義ソヴェートの国に過ぎた四カ年の思い出は、終生私達の心を大いなる喜びと感激をもって充たすであります。そして偉大なる人民、建設者たる人民、勝利者たる人民、真のヒューマニストたる人民についての思い出は、永久に日本勤労者の心のうちに生きるであります。

### 敬愛する

イオシフ・ウイツサリオフ・ウイツチ!

全世界勤労者のいのちである、あなた  
がますます健康に、限りなき長寿を保  
たれんことを。

ソヴェート人民と日本人民との固き友  
誼万歳!

平和・民主主義・民族独立めざす

日本人民の前衛日本共産党万歳!

平和と諸民族・安全の城砦・労働者

農民の社会主義国家

ソヴェート同盟に栄光あれ!

萬国勤労者の偉大なる師父

敬愛する

イオシフ・ウイツサリオフ・ウイツチ

スターリン萬歳!

一九四九年五月二十一日

感謝文又署名タロ運動準備委員△△

以下70万人捕虜の頂点に君臨したシベリア天皇達の署名は割愛ス

### ※追記

この感謝文は、長さ30メートルの真紅の布地台の白布へ金糸で刺繍され  
モスクワ国立中央図書館に現存されている。

# 祖父母達の太平洋戦争

松本 拓磨

## 1 はじめに

ぼくは、父方の祖父母が住んでいる三重県伊勢市と、隣に住んでいるおばあさんが若い頃住んでいた、愛知県名古屋市の戦争の様子を伺いました。

## 2 本文

まず、祖父母に話を聞きました。祖母は、開戦時四歳でした。食べ物は配給制で、ご飯は水でふやかし、量を増やして食べるといったとても質素なものでした。そのため太っている人はほとんどいなくなつたそうです。

その頃の子供たちの夢は、陸軍幼年学校か、海軍予科練に入る事でした。軍隊はみんなの憧れの的だつたそうです。

P一五一戦闘機は、乗っている人の顔が見えましたが、こちらの姿を見られたら撃たれるので、すぐに電車のトンネルか家に隠れたそうです。戦闘機は音で判別できて、一人から二人乗っているP一五一は高い「ピー」という音。何10機もの編隊を組んでやってくるB一一九は低い「ブーン」という音だそうです。

またある夜、伊勢市を狙おうとしてはずし、海の上に焼夷弾が降ってきた事や、目の前に銃弾が降ってきた事もあるそうです。足ががくがく震え、とても怖かつたそうです。学校に行くとすぐに警報が鳴って、家に帰ると警報は止まり、また学校に行くと警報が鳴り、の繰り返しだつたそうです。家の電気は燈火管制といつて、電球に箱をかぶせて光が漏れないようにしていました。これは、敵にばれないようにするためです。

戦争が終わつたとき、空襲で中学校は丸焼けでしたが、身内に被害がなくてよかつたと言っていました。しかしその後も、落ちた爆弾を拾って手に大火傷を負つた子供もいたそうです。最後に祖父は「戦争は人間の本性を変えてしまうとても恐ろしいものだ」と言っていました。

次に、隣に住んでいるおばあさんに話を聞きました。おばあさんは、太平洋戦争の事を大東亜戦争と呼びます。大東亜戦争とは日本側での太平洋戦争の呼び方です。

当時、名古屋市熱田区に住んでいたのので、戦禍を避けるため小学校6年生の時、昭和一九年の夏、豊田市高岡町の願誓寺に親元を離れ、学童疎開をしました。そ

の時、皇后陛下が詠まれた「次の世を 背負うべき身ぞ たくましく 正しく伸びよ 里に移りて」という歌がとても印象深く残っているそうです。その時、先生からビスケット一袋をいただいたが、もったいなくて食べることができず、まだ小さい妹に送ったそうです。

疎開中に空襲と同じ位恐ろしい事がありました。それは昭和十九年十二月七日の東南海大地震と、翌月の昭和二十年一月十三日の三河大地震です。この地震では、この世の終わりかと思うほど地面が波打ち、上からは瓦が落ちてきたり、お寺の蔵が崩壊したりしました。何人もの児童が怪我をして、本当に恐ろしかったそうです。

その後、卒業式のために名古屋に戻りました。卒業式の日、空襲の災禍で自宅を失くしてしまいました。その夜警報が鳴り、眠い目を見開いて、朦朧としながら防空頭巾を被り、近くの防空壕に一時避難しましたが、そこも危険だということとで、桜田町の東邦ガスのビルで夜が明けるのを待ちました。そこには、自分たちのほかにも大勢の人たちが逃げ込んできていました。不安と恐怖の気持ちで夜が明けて外に出ると、一面焼け野原で、土の中に埋めた米まで燃えていました。その日卒業式は予定通り行われましたが、誰もがみな虚ろな表情でした。

何もかも失くしてしまったおばあさんの家族は、数日後、員弁郡北勢町の親戚の家に住む事になり、そこで大勢の人たちと頭を深く下げ、敗戦を告げる玉音放送を聴いたそうです。

### 3 感想

今回おばあさんたちに話を伺いたいとお願した時、表情が辛そうに感じられ、あまり話したくないような雰囲気でした。その表情から、僕たち若い世代には、想像もつかないような深く悲しい思い出があるのだと思いました。

祖父は、「昔は国のためなら死んでしまっても悔いはないと思っていた」と言っていました。それは、本当の気持ちでしょうか？人間の命は、国のためだけのものなのでしょうか？祖父の言っていた「戦争は人間の本質を変えてしまうとても恐ろしいものだ」という言葉が、心に重く残りました。

# 祖父母達の太平洋戦争

塩野 有加

\*はじめに:

岐阜県加茂郡八百津町に住んでいる母方の祖父母に、直接会いに行つて聞いた。「太平洋戦争」の時、祖父は九歳、祖母は六歳だった。当時、国内では「大東亜戦争」と呼んでいた。

二つ目は、愛知県豊橋市前芝町に住んでいる父方の祖父にも、直接会いに行つて聞いた。

その時、祖父は一五歳だった。私には、戦争の経験が無い。テレビで、戦争のニュースが流れても、まるで他人事のようにしか考えず、戦争の悲惨さは、解からない。だから、戦争の実体験の有る祖父母の話聞いて、少しでも理解出来るようになりたいと思つた。

**\*母方の祖父母の体験:**

祖父母は、田舎に住んでいたので、疎開はしなかった。だけど、食べ物に飢えていた。とにかく食べる物が無かった。たくさんの米は無く、麦も無い。もの凄く空腹だった。

食べられる物と言えば、薩摩芋や桑の実、大豆や少しの米くらいだった。その薩摩芋は、学校の校庭を全部十〜二十日かけて掘り起こし、そこで育てた物だった。育つた薩摩芋は、とにかく美味しかったそうだ。

アメリカの飛行機「B二九」が飛んできて、どんどん家を燃やす。『ウーウー』とサイレンが鳴り響く中、家は燃え尽きて行った。竹やぶに防空壕を作る。夜、防空壕から見ると西の空は赤く染まる。その時祖父は、「もう日本は終わってしまったのだらうか……」、そう思つたそうだ。静まると、家に帰った。当時は、灯火管制が敷かれていた。人が居ると相手に解かると空襲を受けるので、布をかけたりにして明かりが漏れないようにした。

終戦になると、アメリカ兵がたくさん来た。そして、子ども達は付いて行った。何故なら、アメリカの兵隊達はガムやチョコをくれたからだ。ただそれだけでついでに行った。食べる物が欲しかったから。着る物も、食べる物が無い。だから、学校に行く時は、藁で草履を作り、履いて行った。雨が降ると、草履がボロボロになって、破れるなんて事は良く有つたそうです。学校の教科書は、藁半紙に印刷された物だった。一冊を二人で使つていた事も有つたらしい。こんな時でも、希望を持って明るく元気に生きていたそうです。

**\*父方の祖父の体験：**

祖父も、田舎に住んでいたもので、疎開はしなかった。それと、農家だったから、母方の祖父母達よりは空腹ではなかったらしい。祖父は、その時一五歳だったので、「陸軍少年航空兵」と言う資格を取る為、試験を受けた。体重は六十<sup>キ</sup>無いと駄目、視力も一・二以上ないと駄目。聴力の検査や、学力テスト、体力テストもあったそうだ。身長が、規定値に達しなかったので、祖父は、不合格になった。その後、蒲郡の三河航空に行つて、飛行機の部品作りをした。御飯は、薩摩芋を主食とし、一食は握りこぶし程度の芋が二個、それと、芋の蔓の煮物や、豆かす等を食べて終わりだった。米は、一人一日一合だけしかなかった。

芋には、黒斑病という芋の病気も流行つたそうだ。祖父が高等小学校二年の時、甲種食料増産隊に入り、渥美半島の牧場に行つて開墾し、麦や薩摩芋を作つたり、近隣の、農家に勤労奉仕に行つたそうだ。ある日、祖父がいつも通り土を耕していたら、「B二九」と言う飛行機が来て、上から攻撃を受けたそうです。隠れたので、怪我はしなかったそうです。

実家に帰省したとき、家から少し離れた所で、爆弾が落とされ、田んぼが直径四mくらい掘れた事もあったそうです。

終戦八月一五日、東を向いて皆で正座をしながら、敗戦の玉音放送を聞いていた。その近くに居た、幹部と小隊長が泣いていた。しかし、終戦になつても、ひもじい思いは変わらなかつた…。

**\*感想：**

戦争の事を聞いて最初は、こんな事が有つたのだから、やっぱり他人事のように考えていたけれど、話が進むにつれて、自分が悲しい気持ちになつて行く様な気がして、少しは理解出来たのかなと思つた。

私は、小学校三年生の時、アメリカ合衆国のスミソニアン博物館に行つて、戦争の事について、色んな資料を見て来た。その時、私は酷く悲しい思いをした。原爆を落とした事が、戦争を早く終わらせ、無駄な犠牲者を出さずに済んだというふうに、美化されていたのだ。実際は、その原爆の下で、何十万人という罪もない犠牲者が出ていたのに…。

その博物館を、凄く悲しい思いをしながら出て、ホワイトハウスの前を歩いていると、何十年もの間、二四時間座り込んで核兵器に反対している女性と会つた。そして、彼女から「No more Hiroshima, No more Nagasaki.」という言葉が贈られた。

去年、中学一年の二月に行われた「旺文社Lし全国ジュニアスピーチコンテスト」で、戦争の事に触れたスピーチをした。私は、そのスピーチの中で平和につ

いて問い掛けた。

今、私に出来る事は、戦争体験を数多く聞き、自分に出来る表現の仕方、それを全世界に発信していく事だと思ふ。

## 祖父母達の太平洋戦争

花井 玲菜

私は、このレポートをつくるために曾祖母に話を聞きました。曾祖母が住んでいる豊橋市について、話を聞きました。

第二次世界大戦は、一九三七（昭和十二）年に始まりました。そして、一九四三（昭和十八）年頃にひどくなってきました。その頃豊橋のほうでは、自警団の人が竹を削って竹やりを作り、その使い方を婦人会のひとに教えていました。でも、竹やりはあまり役に立たなかったみたいですよ。

B二九が飛んでくると、市役所でサイレンが鳴りました。それを聞いて、みんな防空壕の中へ避難しました。防空壕の中には服と食料があり、安全になるまで、そこで生活します。

空襲で焼け野原だったため、豊橋から名古屋のほうが燃えているのが見えたそうです。今考えてみると、それはすごいことだと思います。それだけ何もなかったんだと思います。

一九四五（昭和二十）年、豊橋に雨が降ってきました。神を信じる日本人は、豊橋に空襲がきても燃え広がらないように、神が雨を降らせてくれていたんだと信じていました。そして、B二九が飛んできて、空襲になり、豊橋の町が燃えていくのを見て、あれは雨ではなく灯油だったんだと知りました。

B二九は空襲を落とすときに、中の人逃げられないように建物の周りから中心に向けて、渦を書くように順に落としていきました。

豊橋には海軍の基地があり、B二九はそこを狙って、爆弾を落としました。その海軍の基地と間違えて、私の祖父の家と左二軒が燃えました。

でも、間違いだと気が付いたのか、基地の方も空襲にあいました。そして、八月十四日にポツダム宣言を受諾して、第二次世界大戦は幕を閉じました。

私はこの話を聞いて、戦争は日本のいろんなところで、いろんな出来事があったんだとおもいました。一番驚いたのは、自分の祖父の家が狙われて、空襲にあったことです。とても驚きました。

こうして考えると、戦争は常に自分が狙われていると、皆が考えて生活していたのかなと思います。そうすると、いつも神経がピリピリしていたんじゃないかなとも思っています。私はこの話を従姉妹と聞いたので、また祖父の家に行ったときに戦争について、その子と話してみようと思います。

## 祖父母達の太平洋戦争

寺澤 光姫

●はじめに・・・

私は祖父に、戦争の体験について聞きました。祖父が体験したのは、名古屋大空襲です。その名古屋大空襲というのは、第二次世界大戦中にアメリカ軍により行われた名古屋に対する空襲のうち、最大といわれる空襲のことです。祖父は、当時の状況やその時の自分について、色々教えてくれました。

昭和十九年、当時の祖父は十四歳でした。軍需産業が盛んだった港区において、当時中核拠点であった軍需工場に勤めていました。中学生になると嫌でも連れて行かれたそうです。そこでは、海軍兵器の製造に携わっていました。その製造においては、厳しい検査がされていたようです。

一九四二年四月十八日にアメリカ軍のB二五爆撃機によるドーリットル空襲が行われ、名古屋にも初の空襲がありました。これが、空襲の始まりです。

一九四四年七月、サイパンなどのマリアナ諸島をアメリカ軍が制圧し、ここが日本本土に対する空襲の基地となりました。同年十二月十三日、B二九爆撃機九〇機による、航空機関係の工場であった三菱発動機大幸工場に対する初の本格的空襲が行われました。

天候等の関係から思うように爆弾はこの工場に命中せず、その後執拗に爆撃を繰り返した六回のこの工場に対する空襲でやっと壊滅的な打撃を与えました。工場に当たらなかった爆弾は周辺の民家に命中し、民間人の死者を多く出しました。また、この十二月十三日には、「東洋一の動物園」と謳われた名古屋市東部の東山動物園においても、治安維持を理由に猛獣類が多数射殺されました。

(出典…フリー百科事典『ウィキペディア』)

この頃、祖父が勤めていた工場でも空襲がありました。海軍兵器を製造していたため、アメリカ軍に狙われたのです。

戦争中、空襲に対する警報は2種類ありました。「空襲警報」と「空襲警戒警報」

です。空襲警報が出された場合は工場から出て避難することができませんが、空襲警戒警報の場合は発令されても工場に戻らなければなりません。祖父の工場での空襲は、空襲警戒警報が出されている時に起きました。なので門が閉まっております。中にいた学徒や工員たちは逃げることができず、亡くなったのです。しかし、私の祖父はその頃、たまたま体の調子を悪くして医者に行っていたのです。そのおかげで祖父は生き延びることができました。港区の辺りは空襲が激しい地域であったため生き残った人は少なかったそうです。祖父の同級生や友達はそこで皆死んでしまったと聞きました。祖父はとても幸運な人間だったのだ、と私は思いました。今でもその場所では1年に1回、空襲の慰霊祭が行われています。

空襲は、最初は三菱財閥系の工場や名古屋港などの軍需関係を中心に行われていましたが、一九四五年頃からは民家への空襲が始まり、三月頃からは焼夷弾による深夜の空襲が多くなりました。

二月一五日には焼夷弾二万発が市中心部の千種の三菱発動機工場周辺に落とされ、三月十二日の夜には、名古屋市市街地に対する大規模空襲が行われ、市の五%が焼失したとされています。そして、三月一九日の午前二時頃、爆撃機二三〇機による名古屋市の市街地に対する大規模空襲が行われ、一夜にして一五万—三三二人が被災し、そのうち八二六人が死亡、家屋三万九八三棟が焼失したとされています。市中心部は焼け野原となり、名古屋駅の焼けこげた姿が遠くからでもよく見えたそうです。

六月には熱田空襲が行われ、約一〇〇〇名にのぼる死者をだしました。その後も空襲は行われ、名古屋市は他の大都市と同様に壊滅的に破壊されたのです。

そして、この戦争は一九四五年に終戦しました。

この戦争で名古屋市は、全部で六三回の空襲にあり、死者八六三〇名（実際は一万以上にのぼるとみられる）、負傷者一一一六四名、罹災者五二万三千名を出しました。

- ・ 1945年3月12日 名古屋大空襲
- B・29・288機 死者602名 負傷者1238名 全焼2万9千戸
- ・ 3月19日 死者1037名 負傷者2813名 全焼3万6千戸
- ・ 5月14日 B・29・480機 この日、名古屋城焼失
- ・ 6月9日 B・29・43機 死者2068名 負傷者1944名
- ・ 6月21日 B・29・120機 死者426名 負傷者327名

（出典…フリー百科事典「ウィキペディア」）

戦争を体験した祖父母の子供たちは、戦争を知りません。国を豊かに、心を豊

かにしようよと、戦後の祖父母の子供たち、つまり私たちのお父さんやお母さんは「戦争を知らない子供たち」という歌をよく歌ったそうです。

●感想・・・

私は今回祖父に話を聞いて、とても身近な祖父が戦争という「危険」を体験していたことを改めて感じました。戦争というと「昔のこと」と思ってしまうのですが、祖父はすっかり覚えていろいろな話してくれました。それを聞いていたら、とても最近のことに思えました。祖父は話しながら、何度も何度も「戦争はいかんよ。」と言っていました。当時の祖父は十四歳で、現在の私たちと同年齢です。どれほど怖い思いをしたのかよく伝わってきました。もし、今日本が戦争をされていて、大規模な空襲にあっていたら、私は恐怖に耐えられないと思います。戦争は恐ろしく、醜いものです。今後絶対にあってはならないと思いました。

## 祖父母達の太平洋戦争

杉田 大知

はじめに

僕は、祖父母の中でたった一人の戦争体験者である父方の祖母に話を聞くことにしました。また、当時の日本では太平洋戦争のことを大東亜戦争と呼んでいたそうです。

上海での体験　祖母　七歳～十二歳

僕の祖母は、大阪で生まれました。太平洋戦争が始まる前の一九四一年の夏に、中国の上海で飲食店を営んでいた叔父（曾祖父の兄弟）の所に養女にだされました。その当時祖母は七歳で、養女にだされることを知らされなまま、五人兄妹の中たった一人、上海に行かされました。祖母は父親と一緒に、列車で大阪から博多まで行きました。そして、博多から船に乗り、上海に到着するまで三日間もかかりました。中国で生活していた日本人は戦争の影響をそれほど受けていなかったため、祖母は食生活には不自由しておらず、飲食店で出されているような食事を食べることができました。

一九四一年十二月八日の夜、寝ているときに大きな音がして、祖母が近くの港に行ってみると、イギリス軍の船が沈められていました。そしてラジオのニュースで、日本軍がハワイの真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まったことを知りました。また、祖母はアメリカ軍の爆撃機が上海の上空を通り、日本へ向かうところ

を何度か目撃しました。上海には日本人租界やイギリス人租界、フランス人租界があり、アメリカ軍は日本人を狙って空襲を行いました。そして、空襲に巻き込まれた犠牲者もいました。

一方、大阪にある祖母の実家は、焼夷弾によって家を焼かれてしまい、借家を借りて生活していました。幸い、空襲にあう前に貨物車に預けていた着物などの荷物は無事で、それを農民の人と米や野菜に交換してもらい生活をしのいでいました。祖母の兄は学校に行きながら工場で働かされていました。ある日祖母の兄がたまたま病気で学校を休んで家にいた日に、学校が空襲にあい同級生が何人も亡くなってしまいました。

終戦後の日本での生活　祖母　十二歳以降

一九四五年終戦後、祖母は日本に帰国することになりました。上海から船で三日かけて日本の港に到着しました。そこで祖母が一番驚いたことは、自分たちが食べる食事がバケツの中に入れられていたことです。しかもそれは、麦や味の薄い味噌汁で、食べられたものではありませんでした。そして、実家に帰った祖母は上海時代とは違って、厳しい生活と日本の現状を知りました。国から配給される一人分の食料は、わずかなメリケン粉（小麦粉）だけでした。戦後は物資が乏しくて中には餓死する人もいました。

常に空腹状態であった人たちは闇で食料を手に入れていました。列車に乗り、田舎の農家へ行き米、麦、野菜を買っていました。しかし、それは違反に当たるので警察に見つかった人は没収されて、ようやく手に入れた食料も手放さないといけなくなりました。そして、終戦後一年で父親が病死してしまい、残された母親と五人の兄妹はより貧しく、苦しい生活を送りました。

くおわりに

今回のレポートで初めて祖母がこのような体験をしていることを知りました。

祖母は戦争中、上海での幼女時代には生活に不自由なく暮らすことができたといっていますが、本当は両親、兄妹から離れて暮らし、つらく寂しい思いをしていたと僕は思います。爆弾を積んだアメリカの爆撃機が、上海の上空を飛んでいくところを見るたびに、日本にいる家族を思い出し心配していたのではないかと思います。

戦争の悲劇は実際に戦っている人だけでなく、その家族、そして国民全体が悲惨な生活を送らなければなりません。世界ではいまだに戦争をしている国があります。多くの人々が命を落とすし、家族を失ったり家を失ったりしています。

今、僕は生活に不自由を感じることもなく、家族と暮らせています。現在の日本の「自由と平和」を維持し、二度と戦争を起さないためは、実際に戦争を体験

した人々に話を聞いて教科書に載っていない戦争の悲惨さや真実を知り、そして戦争を体験したことがない次の世代に伝えていくことが必要であると思います。

## 祖父母達の太平洋戦争

加納 孝仁

### 1 はじめに

祖父は原爆が投下されたその日に広島に行ったという話しを生前してくれました。その時の話はとても強烈で僕にとってもとても印象的な話しでした。このレポートの中で貴重な祖父の話を語り継ぐと共にこの戦争についても勉強していきたいと思います。

### 2 第二次世界大戦

第二次世界大戦は主にドイツ・イタリア・日本の同盟国対、アメリカ・イギリスの連合国での戦いでした。戦争の原因は様々ありますがヨーロッパにおいては第一次世界大戦後のドイツの処理などで、日本においては中華民国における利権の対立、またアメリカに仕向けられた戦争といわれることもあります。

日本が本格的にこの戦争に参加することになったのは1941年12月8日のハワイ真珠湾攻撃からです。この奇襲攻撃を口火として戦地は拡大していき、当初は優勢だった日本でしたがミッドウェー海戦を機に守勢へとまわります。そして今話題の映画になっている硫黄島での戦いや沖縄での陸戦があり、日本について原子爆弾が投下されます。8月の日の広島、八月九日の長崎に投下され二週間のうちに二都市合計二十万もの人々が死亡しています。

そして八月一五日にポツダム宣言を受諾し、終戦を迎えました。

### 3 祖父の話

僕が生前の祖父の話を聞いて、一番印象に残っていたのは広島に原爆が投下されたとき、広島郊外にいたという話です。八月六日広島に原爆が投下され、原爆の爆風により、ガラスが割れ、頭部にガラスの破片が刺さり、頭にタオルを巻き、止血をしてまわりに倒れている人々を、幸いにも怪我がなく元気だった祖父が助けたそうです。そしてその日のうちに爆心地に行き、原爆を受けた人たちが「水が欲しい」と泣き叫び、水を欲しがる人々に、八百屋から桃を貰いその桃を絞って倒れている人にあげたそうです。そしてその後、祖父も気を失ってしまい気がついたら、救護所にいたそうです。その後の症状や検査で祖父も放射能を浴びていたこ

とが分かり、原爆の後遺症の一つである、過敏症という皮膚の病気にかかり、免疫力が低下したそうです。その後祖父は千葉に移り住み、祖母と一緒に元気に暮らしていました。僕が覚えている祖父は手に黒い斑点のような物はありましたが、見た限りは普通の老人よりも元気に過ごしていたように思います。

また、祖父は海軍の機関長だったらしく、フィリピンに船で行き、戦争により負傷した日本兵を助けていたそうです。その船での話で驚いたことは、日本に近いところで、敵の船から攻撃を受け、祖父の船は破壊され海に放り出されてしまい、眠らないように歌を歌いながら救助が来るのを待ったそうです。しかし、その時乗っていた乗組員の半数の人は亡くなってしまったそうです。また、祖父は亡くなる数ヶ月前に祖母との出会いの話をしてくれました。

祖父が海軍の学校に入っているとき夜な夜な退屈しのぎの為と言っていました。が尺八を持って船の上で演奏していたそうです。そんな姿を見た祖母も三味線が上手だったので祖父の尺八の演奏に合わせて三味線を演奏したそうです。その後、祖父は戦争に行き、もう会えないかと思っていたらしいのですが戦争で無事に生き残り、祖母を探したところ祖母も無事に生きていたので、二人ともだいたい半年はとっていたのですが結婚したそうです。

#### 4 感想

今まで僕は戦争と聞いても教科書に出てくる程度でどんな内容だったか詳しく知らなかったし、あまり興味もありませんでした。祖父の話も祖父が僕の家に引っ越してくるまでは聞いたことがなかったし、祖父が戦争に行っていたことすら知りませんでした。

しかし、祖父が家に引っ越してきてから毎日のように親や兄と一緒に祖父のもとへ行き色々な話を聞きました。家に来てから数ヶ月後に祖父は亡くなってしまいました。それまでに聞いた祖父の話はとても強烈で忘れることが出来ないくらい凄い内容でした。

教科書だけの話だと思っていた戦争に祖父は参加し、教科書には書いてないこともたくさん経験し、また祖父の友達もたくさん死んだと聞いたときは本当に驚きました。今、戦争を経験した人たちもだいたいぶぶぶぶとなり祖父のように直接その時の話を聞くチャンスもなくなっているんだなと思います。このレポートを書きながら戦争の悲惨さやたくさんの人が死んでいるということ、そういう人たちが頑張ってくれたからこそ今、様々な人が元気に暮らしているということを忘れてはいけないなと思いました。貴重なお年寄りの方の話をもっとたくさん聞いてそれをどんどん伝えていくことも大切なことだと思います。

# 祖父母達の太平洋戦争

高木 宏明

はじめに

今回レポートを作成するにあたって取材した私の祖父、高木三郎氏は昭和二年に愛知県刈谷市に生まれ、戦争中は旧通信省にて無線関係の仕事をし、戦後は電電公社に勤めて六十歳で定年退職をして現在豊田市に住んでいる。このレポートは祖父から聞いた終戦の話と祖父の書いた自分史の終戦について書いてある所を中心にまとめたものである。

**戦争と私**（祖父の自分史より）

私の住んでいた刈谷市には依佐美送信所という施設があった。高さ二五〇mの鉄塔が八本建っている場所を通るとき、私はいつも見上げて雄大な気持ちになり、大きくなったらこの施設で仕事がしたいと思った。

父の友人で、私は「無線のおじさん」と呼んでいた人が依佐美送信所の長波施設で主任技術者として勤めていた。いつもは外から鉄塔だけは眺めていたが、送信所の内部はどのようなになっているのか興味があった。ある日、父と依佐美送信所に見学に行った。「無線のおじさん」の案内で、送信施設を見て歩いた。雄大な施設で目を見張る物ばかりで、これが言われていた第一次欧州大戦でドイツからの賠償としての施設か、改めてドイツの製品技術の高さに感心したのを覚えている。その後、国民尋常小学校を卒業し、中学に入学した年に日本軍による真珠湾奇襲攻撃によって太平洋戦争が開戦した。アジアを中心に破竹の勢いで進軍を続けたが、ミッドウェイ海戦で大損害を被り形勢は逆転し、連戦連勝の文字が躍っていた新聞は玉砕や転進などの言葉が一面を埋めるようになっていた。

中学を卒業後、当時、軍需工業の花形であった三菱重工航空機部門に就職したが無線技師の夢を捨てられず、すぐに退職し「無線のおじさん」の紹介で当時の通信省の無線技師試験に合格、暗れて幼少の頃からの夢であった仕事につける道が開けたのである。

昭和一九年四月一日、東京府北多摩郡神代村入間にあった国際電気通信（株）講習所本所（現在はNTT中央電気通信学園）技術本科に入学した。入学は技術予科終了者と中学（旧制）卒業で入社して二ヶ月の講習を受けた者が一緒になって、総勢は二五〇人になった。

授業は無線通信・通信術・実験などの教科は会社の先生が、数学・物理・外国語・体育（剣道・相撲・弓道）などの教科は大学など外部の先生に教えられた。

毎朝授業の始まる時間になると、決まって近くの調布飛行場から戦闘機が何機か編隊を組んで教室の上を飛んできて煩かったが、戦況が悪化するに従って駐機してある戦闘機の数も目に見えて減っていった。また、京王電鉄では飛行場の側を通るとき、乗客はその方の窓を締めて見ないようにした。

わが国の戦況は益々悪くなってきた。七月七日には、サイパンの日本軍玉砕によって同島が陥落すると、米軍は長距離爆撃機B-29の飛行場を完成させて日本本土の空襲を開始した。

その頃には、講習所の指導員も出征するようになった。入隊のときは生徒たちは成城学園駅まで見送りにいった。駅前では盛大に応援歌を歌った。その様子を駅周辺の人たちは奇異な目で眺めていた。生徒の中には緋の着物に袴で高下駄の応援団長姿の者が何人かいて、文化住宅の住人には怪奇に写ったようだった。

サイパン島が玉砕した頃から大学教授は、密かに戦局の真相を話してくれた。その反面、農試学校出身の指導員は「われらは陛下の赤子なり、いまこそ立ち上がって国難に立ち向かわん」と激励した。しかし、私たちは戦争は早く止めなければと思うようになった。

九月中旬、夕方の放課後講堂に全員に非常呼集があった。何事か維新前夜の感じだったので覚えている。足早に入ってきた指導員「わが国の戦局は悪化の一途を辿り、もはや勉強をしている余裕はない。養成は打ち切って繰り上げ終了、現場へ配属し国のため奉公してもらうことになった。」と告げられた。そして、現場の概要説明があつて、希望調書の用紙が渡されて散会した。

九月下旬、台湾、朝鮮、内地の無線送信所・無線受信所・有線の統制中継所および中継所と、海底ケーブル敷設船、本土縦断超短波ルート建設（本土決戦に備えて）の要員などの現場に赴任した。私は、希望した無線通信の河内送信所に配属になった。十月一日、私は河内送信所（大阪府南河内郡黒山村北野田）に着任した。そのとき、所長から情報局（内閣直轄）からの密命を伝達された。「君たち若者は、わが国に非常事態発生の場合には、国の首長（内閣総理大臣）または、地方の首長（県知事）の下で行動するようになっていく。」と言われた。そのとき、私は終戦を意識して緊張した。

職場は、南方、東南アジア、中国方面の軍・公用通信、同盟通信と、世界各国に向けての海外放送が主な業務であつた。

海外放送は、日本放送協会国際局が政府の委託を受けて、情報局の監督のもとで、放送プログラムを作成し放送、それを国際電気通信（株）八俣送信所（茨城県）と、河内送信所（大阪府）から世界各地に送信していた。その際、情報局から送られてきた放送プログラムと参照し異なつたプログラムが流れてきた場合は、

放送を直ちに停止させ、音楽をかけてその国の言語で、「こちらは、日本の東京ラジオです」と、送信する監視体制もとられていた。

業務を通して戦況の状態はよくわかった。南方戦線において、玉砕の約一週間位前に、海外放送の空き時間（日没等で電波状態の悪い午後六時の時間帯）を利用し、「特別放送」を現地部隊向けに放送した。

「特別放送」があると、情報局から連絡が入ると、勤務の非番者も集まり、調整室の放送調整盤モニターの前に整列、放送が始まると皆は押し黙り直立不動で頭を垂れ、それぞれは玉砕する将兵を想い聴き入るのであった。

放送は、軍歌等で士気を鼓舞（ときには、司令官の故郷学童唱歌もあった）、それから感謝状の授与、階級特進の伝達等があった。それらはあたかも何か儀式をしているようでもあった。

「特別放送」は、上陸した米軍司令部もスピーカーで聴いていたという。また、特に学童唱歌には複雑な想いであったとのこと。

「君が代」の演奏で放送が終わると、みんなは一言もいわずに帰って行った。

翌日の早朝、現地部隊から関係者各位に、司令官から感謝の電文がはいり、みんなに披露された。それにはきまって、「……祖国防衛の礎になって、全軍一丸になって突撃します」であった。

「特別放送」があつてから、約一週間すぎると、きまって通信の途絶があつた。通信が途絶すると、軍は直ちに通信を打ち切るので、われわれは通信機等が故障しているかも知れないとして、一週間は連続して受信監視と、呼出しは一時間毎に五分ずつ「試験符号」に続けて、「こちらは、健在なり応答せよ」と、E符号を使ったモールス信号で呼出しをした。また、玉砕による通信途絶を何度か体験した。

南方での通信は、マニラ回線（宇品とマニラ間陸軍船舶隊用）の通信途絶で最後になった。その通信は最後の頃、「通信方法で海軍部隊が残っているようだ」と言う者がいたが、やはり、マニラ防衛に就いた海軍陸戦隊一万名の玉砕で終わった。

昭和二十年七月上旬、本社からの通達で国際通信は、終戦の準備に入った状態になって、臨時の通信が多くなって忙しくなった。会社の管理機構は消滅（非常事態体制になった）した状態になった。

「わが国の状況は悪化の一途を辿り、今後如何なる事態になっても、最後まで国際通信の確保に努力するように、これからは、政府機関（情報局一放送・報道関係の通信、軍一参謀本部、現地司令部の通信、外務省一スイス・スウェーデン駐在公館の通信）と、現場担当者の直接取引になった。それぞれ指示されたことは、

すべて記録せず良識ある判断でもって、正しいと確信したものを、各自の責任で実施することになった。また、お互いに指示されたことは、「言わない・聞かない・詮索しない」で、実施されることになった。

また、玉砕しての敗戦、多数の一般人を犠牲にして沖縄敗戦等で、ついに軍は戦争継続を断念したのか、参謀本部など軍関係者は急激に親切丁寧に変わった。通信の申し込み等でも「お願いします」と言うようになった。そして、七月下旬、終戦工作に携わった関係部門の努力で、終戦はいつでもできたが、何をおそれるか、わが国の権力者は決断しなかった。

八月九日早朝、海外放送でソ連の侵攻を知った。米国の非人道的な原爆投下と同様に、非戦閥員の多大な犠牲が予想された。この日、私は夜勤で午後六時ころ調整室に一人でいたとき、放送打ち合わせ線で日本放送協会から電話があった。情報局の係官からで官職・氏名等でお互いを確認した。係官から「今晚八時から北米向けは「重大放送」であるから絶対支障の内容にせよ、なお、このことは上司・同僚はもとより他には絶対漏らさないようにせよ」と、指示された。したがって他の夜勤者（二名）には黙っていた。

米国に対し「重大放送」は、その日朝からの事態でポツダム宣言受諾であると推察、緊張と絶対支障のないようにと、その対策を緊急事態マニュアルに従った。

七時ころ海外放送用短波送信機（R-1号機50KW）の調整に入った。私は緊急時に備えた予備用短波送信機（T-1号機10KW）の調整をした。他の夜勤者が不審に思っ「どうかした」と尋ねた。それで、私は「予備送信機の性能検査をする」と答えた。当時政府関係（情報局・参謀本部・外務省など）からの指示は受けた担当者だけの責任で実施、その内容を他に洩らしたり、聞いたりすることは出来なかった。

そして、停電対策と放送中継線の故障対策（海外放送は名崎・八俣・多摩・足柄・河内各送信所から、到達の安全を図り同一方向へ2〜3波で、しかし、通常は茨城県の八俣送信所と大阪府の河内送信所から2波で送信していた。それで、一方の海外放送を受信して放送中継線の故障に備えた）を取った。

七時五八分ころ、AKからの放送中継線に海外放送のテーマ音楽「越後獅子の管弦楽」が流れてきた。放送調整室の標準時計8時に放送調整盤の赤いKEYをONにし電波を発射した。送信電波の監視用SPから迫力ある音声が届こえた。続いて「愛国行進曲」そして、「This is radio Tokyo in Japan...」で放送は始まった。

通常の放送は音楽が多いが今回は全くなかった。「重大放送」は英語で詳細には分からなかったが、ポツダム宣言受諾通告の放送であることは分かった。それで、

V O A 放送の日本向けを聴取すれば分かると思ひ、放送中継線の故障に備えた短波受信機で放送を受信した。しかし、日本側戦況不利の宣伝のみで通常と変化はなかつた。9時に近づき海外放送は国歌「君が代」の演奏を始めた。「君が代」が終ると同時にV O A 放送が消されたように突然停止した。驚愕したかマイクの入ったまま（部屋を出入りする人の気配はする）で変化があつた。あり得ないが一瞬日本が勝利したか錯覚を覚えた。

V O A 放送で何か言わないかと耳をそばたてるが無音、長い時間に思えたが5分位で放送は再開された。最初に流行歌「天竜下れば」（市丸）であつた。久しぶりに懐かしい感じがした。その一曲は非常に長く思えた。次に「島育ち」（勝太郎）の歌など、次々と日本の流行歌と音楽を演奏された。途中で歌や音楽を聴くのも飽きてきた。何か聞くまではと3時間近く我慢して聴いた。

十日0時、米國V O A は世界に向けて日本政府がポツダム宣言受諾を放送した。日本向けは興奮した声で、「日本のみなさま、平和がやつて来ました。長かつた戦争は終わりました。今晚東京ラジオで、日本政府はポツダム宣言受諾を通告しました。詳細については、スイスおよびスウェーデン国を通して、連合国側と終戦の交渉は行われます。しかし、日本はよく戦いました」と放送した。東京ラジオによるポツダム宣言受諾通告の電波と、V O A 放送の電波によつて全世界に戦争終結を告げた。

そして未明、外務省は東京とジュネーブ電信回線と、大阪とストックホルム電信回線を経由して、スイス・スウェーデン駐在公館に訓令を発信、米国にはスイス国を、その他連合国にはスウェーデン国を通して、ポツダム宣言受諾を正式に通告して、連合国側と終戦の交渉に入り八月一五日に終戦になつた。

**終わりに**

今回のレポートで今まであまり知らなかつた祖父の生い立ちやどのように戦中、戦後を暮らしてきたのかがわかつた。これからも機会があれば積極的に調べてみようと思つている。

# 祖父母達の太平洋戦争

山田 泰豊

## 1 はじめに

僕の曾祖父は、仕事で行っていたビルマで現地召集されて戦死したと、祖父は赤紙が来て広島軍隊に徴兵されて、訓練している途中で終戦を迎えたことを以前父から聞いて知っていた。しかし、共に亡くなっている戦争体験の話聞くことはできない。そこで、開戦当時国民学校一年生だった、母方の祖父に話を聞くことにした。

## 2 祖父の戦中

祖父は1941年12月の開戦当時、神戸に住んでいたが、本土空襲が始まった3年生の時に、兵庫県丹波(今の篠山市)にいる祖母の所に、二つ年上の姉と二人で縁故疎開した。疎開先の国民学校には先生に引率されて、お寺に集団疎開してきた子ども達がたくさん来ていた。集団疎開した子ども達は、生活になじめず、淋しさのあまり、親の元へ帰ろうと線路伝いに、お寺から逃亡したことがよくあった。先生は泣く子を連れ戻していた。

疎開先で祖父が辛かったことは、親から離れた事だけでなく、お腹がすいてたまらなかつたことだ。近くの畑のイモを盗んで川で洗って食べたこともあった。同じように疎開の子どももイモなどを盗むことがよくあったので、田舎の人から嫌われていた。食糧不足を補うため、学校では校庭を耕し畑にしイモを植えた。兵器を作る金属が不足してお寺の鐘や制服のボタンまで国に差し出した。松の根から出る液が戦闘機の燃料になると、山に入って松の根を掘った。学校では勉強よりこういった事ばかりしていたし、早く大きくなって兵隊さんになりたいと、どの男の子も思っていた。

## 3 祖父の戦後

空襲で神戸の家も店も焼けたため、一家は丹波で暮らしたが、戦後は食料不足がもつとひどくなつた。山や河原や荒れ地を開墾して畑にし、イモや豆を作つたし雑草も食べた。イナゴをたくさん捕まえゆでて食べたり、ドジョウ、ザリガニも捕まえたりして、貴重な蛋白資源とした。豚やウサギ、にわとりなど草食の動物も育てて食べた。甘い物はなかつたので、柿の皮を干して粉にして、団子に混ぜて食べた。小学校は男組と女組に分かれていたが、中学校では男女共学になつて、椅子を男も女も出来るだけ離して座つた。給食はなく、農家の子どもはご飯の弁当だったが、疎開の家では米がなく、サツマイモのふかしたので我慢してい

たので、子ども心にうらやましかった。

食料だけでなく色々な物がなかったので、遠足には予備の草履を自分で作って、腰にぶら下げて行った。必要なものは自分で工夫して作った。それでも年々少しずつ食べるものが良くなり、すいとんに入れる団子の量が多くなり、次々にコメの量も増えてきて嬉しかった。やっと一息つけたのは戦後5年ほど経ってからだった。

#### 4 感想

祖父は「戦中の子ども達は、教育によって国のために死ぬ兵隊さんになるために、生かされてきたと思ひ込まされていた。」「戦争のおかげで自然を学べたことが、今になって思うと良かった。」と言っていた。僕は戦争に行きたいと思っていた。その時代の子どもの気持ちが信じられなかった。僕がその時代に生きていて、先生にそのように教えられたからといって、お国のために死にたいと思ったのだろうか。でも賢い祖父でさえそう思っていたと言うのだから、その時代にいて、それが良いことと思ひ込んだとしたなら、兵隊さんになりたいと言う軍国少年になったように思う。

また、僕は父から大切にしまっていた、戦地から来た曾祖父の6通の葉書、戦死を知らせた死亡報告書などを見せてもらった。戦地で昭和20年に書かれた茶色くなった葉書は、細かな続け字でびっしりと書かれてあって、何が書いてあるか、あまり読めなかったが、家族名前が所々に書いてあり、日本に残した家族を思う気持ちが字にこもっているように思えた。

死亡報告書には「右 昭和貳拾年五月七日 時刻不詳 ビルマ国ブルーム付近に於て戦死す」と透けそうな薄い紙一枚に、昭和21年11月7日付けで記されていた。一年半も経ってから戦死を知らされ、それまで家族は曾祖父が帰って来るに違いないと思ひ待っていたらうに、曾祖母はどんな思ひでこれを読んだのだろうと思ひと辛くなった。

これらの書類に触って、それまでの生活をすべて捨てて、戦争に行かなくてはならなかった曾祖父達の時代、命を張って戦う人のいた時代の重さが伝わってきた。戦時中、戦地で戦っていた曾祖父達も、日本で待っていた家族達も、家族と離れて田舎に疎開していた子ども達も、みな必死に生きていたのだということが今回の聞き取りを通してわかった。

# 恐ろしかった戦争 孫たちへ

森村 匡伺

私は昭和十一年生まれの七十一才です。

おじいちゃんの小さい頃、ずっと日本は、アメリカと戦争をしていたのです。その頃おじいちゃんの家は、名古屋市中区東新町にありました。昭和二十年三月二十四日アメリカのB29と云う爆撃機226機が名古屋を空襲して、1,617人亡くなって、けがをした人が770人、燃えた家が7,066戸で、おじいちゃんの家も燃やされてしまいました。その時、おじいちゃんは9才で小学二年生でした。

小学三年生から上の学年は、名古屋は空襲されるので、空襲されない遠い田舎へ集団学童疎開をしていて、学校は一年生と二年生だけでした。おじいちゃんの記憶では二月十五日、この日の空襲はB29爆撃機101機、61人亡くなって、けがをした人52人、燃えた家709戸の被害を受けました。おじいちゃんは学校にいました。空襲警報のサイレンが鳴って、防空壕にみんな逃げたのですが、一年生の子が一人いなかったので先生が運動場にさがしに行つて爆弾で殺されました。悲しかったです。

家が燃えた時、鶴舞公園へ逃げたのです。逃げる道は両側の家も燃えていて、道は火の海になっていました。水をかけた毛布を頭からかぶり体が燃えないようにして、おじいちゃんのお父さんと、お母さんと、タキお婆さんの四人で逃げました。あくる朝、燃えていないしんせきの家をさがして行きました。道には空襲で死んだ人がたくさんあって、警防団の人が片付けていました。ぬれた毛布をかぶらなかつたら、おじいちゃんもこのように死んでいたと思います。

食べるものがなく、サツマイモのツルとか、サツマ芋の粉とか、トウモロコシの皮の「すいとん汁」など、今では豚さんが食べているようなものを食べていたのです。

本当に毎日が地獄のような日々でした。おじいちゃんはみんなが悲しむ戦争は、二度としてはいけないと思います。

# 中学二年生の日記より

藤井 明男

私は昭和五年十一月生まれで、今年七十七才になる。昭和十八年四月、愛知県立明倫中学校（現〓明和高校）へ入学した。二年生の二期から勤労奉国隊と称して、学徒動員で名古屋市守山区の矢島工業で特攻機の部品造りに励むことになる。

名古屋市の中心部に近い中区東新町に住んでいたので、二十年三月十九日、米機焼夷弾爆撃で家は焼かれ、父と弟と三人で生命からがら逃げた。そして東区石神堂町にある親戚（母の兄）へ寄留した。そうしたら一週間後の二十五日に米機の激しい爆弾攻撃に遭い、家もすべて吹き飛ばされ、本当に生命からがら逃げた。近くには死体が転がっていた。母や小さい弟は、岐阜の田舎に疎開し、妹達は学童疎開をしていた。

不思議なことに当時（中学二年生）の日記が残っているので、その中から引用する。

★昭和二十年四月二十一日 土曜日 晴

一日中、工場の仕事なし。裏山の防空壕掘りをする。昼食後、剣道の杉山先輩の指導の下、日本刀で竹切りをする。変電所燃えて、電流が十分に通じないためか名鉄は停止し、瀬戸電も遅い速力で動く。我等の日々製作する四二型は特攻機の排気管であると聞き、作り甲斐を感じず。

★昭和二十年五月四日 木曜日 晴

ヒットラー死し、独逸（ドイツ）の運命如何。日本の立場も最悪の場に近く直面するであろう。いよいよ益々特攻機増産に励まん。独逸も伊太利（イタリア）と同じ道を踏み、同じ運命になるだろう。ムッソリーニは処刑され、枢軸国もいよいよ日本だけ。真に孤立である。

★昭和二十年七月十三日 金曜日 快晴

朝から仕事なし、いよいよ今日帰宅できるので帰り支度をした。満員の汽車に乗り、やつと岐阜駅へ着いた。余りにも全滅という言葉そのものであるのに驚く。見渡す限り金華山の麓まで只燃え、枯れた真黒な樹木が立並ぶのみ、誰がこの地獄さながらの景色を想像したであろう。

★昭和二十年七月十五日 日曜日 雨

交通不便なる山村までも敵機は襲うのだ、遂に敵艦船はわが本土に対して艦砲射撃を敢えてする如き事態に立ち至ったのである。本土決戦に火蓋を切らんとする合図ではなからうか。

かつて仏首相たりシクレマンソーは言った。「余はパリの前に於て戦い、又パリの市中に於て戦い、將又パリの背後に於て戦うであらう」と。真にこの意気である。日本一億の意気を以て戦えば、米英何て恐るべきである。

又、仏国の軍司令官たりシフオシユは言う。「退却しても負けではない。土地を取られても負けたのではない。負けたと思つた時、負けたのである」と。真に然りである。

★昭和二十年七月三十一日 火曜日 晴

昨日午後二時頃、敵艦機二機来襲。矢島工業を爆撃する。爆撃後の姿、憤激の二字あるのみ。今日、四時頃より昨日の爆撃で戦死した三名の方の合同慰霊祭あり、社長、愛知県知事の弔辞あり。

★昭和二十年八月十五日 水曜日 晴

三妹各々疎開せる下方、谷汲へ行く。正午臨時ニュースあり、陛下の玉音を聞く、平和降伏、否無条件降伏。なんたる恥ぞ。わずか一種の原子爆弾に恐れ、光輝ある三千年の歴史、世界に比類なき国体をなくしてしまうとは、悲憤、悲憤、必ず復仇を打たん。

銘記せよ、昭和二十年八月十五日。国恥記念日とせよ。

☆今、振り返つて日記を読む時、純粹多感な年代は戦争という魔物の坩堝に巻き込まれていたことになる。このような時代が二度とないことを願つて筆を置く。

### ※編集注

日本を空襲した飛行機

ボーイングB-29戦略爆撃機 別名Ⅱ超空の要塞 2, 200馬力発動機四基  
乗員十人から十四人 爆弾搭載最大9, 100kg  
艦載機

航空母艦から発進した中型爆撃機及び戦闘機。戦闘機による機銃掃射は爆音、発砲音、弾丸の通過音、命中音で人々を恐怖のどん底へ追い込んだ。

三月十九日の空襲 被害 名古屋市街全地域  
B29 290機 死者826人 負傷2728人 罹災家屋39, 893戸  
三月二十五日の空襲 被害 主に千種・東・昭和区など  
B29 226機 死者1, 617人 負傷770人 罹災家屋7066戸

— 3 2 —

## 戦争について

井戸 久子

私は昭和十年生まれ、七十二才です。小学三年生当時を書いてみました。

## 衣

衣料は販売する店も少なく商品の種類も限られていました。小学校三年生の頃より戦争がだんだん激しくなり人が生きるに必要なあらゆる品物がどんどん少なくなり、政府は国民一人一人に一日に食べる米の量を決めたりあらゆる品物が配給制度に変わり、一人一人に持点が決められた点数券でしか買えない制度になりました。やっと点数で衣類が買えても農家で食べ物に交換しないと生きていけない時代でした。

私の服は母が自分の着物を、私の洋服に仕立て直したものでした。着物の柄も今のように明るいのではなく、黒っぽい地味な色ばかりでした。都会に住む人は同じような生活でしたので気にしませんでした。ランドセルはほとんどの子がなく布で作った袋に学用品を入れていました。

女の子の髪型は今のようにはありませんでした。全員「おかつぱ」の髪型で、男子は坊主頭でした。お風呂も今のように入れず、衣類も体も汚れても洗う石鹸も少なく、頭にシラミ（人間の血を吸う虫）・青漬を出している子・トラホームで、学校で治療してもらう子が並んでいました。冬は寒さで手が霜焼けになり霜焼けが崩れてウミの出ている子もいました。今のように石鹸も少ないので衛生面も悪く、皮膚病の子どもが多かったです。お腹の中に「蟻虫」ギョウチュウ「一回虫」カイチュウ」などの虫がいる子がほとんどで、学校は三カ月に一回くらい「虫下し」と言う薬を飲ませていました。体をきれいに洗うこともできず不潔な生活でしたが、今のようにアトピー・アレルギーの子はいませんでした。

寝る時は大人も子どもも、着ていた服のまま寝るのです。パジャマで寝る人は一人もいません。空襲警報のサイレンが鳴ると寝ていても飛び起きて、部屋の電

気を消し外の防空壕へ逃げ込むのです。ですから男の人はズボンに巻脚絆を巻いて、女の人はモンペと言うダボダボの手製のズボンをはいて寝ていました。

大人の女性は全員国防婦人会員にさせられ、町内から召集令状で強制的に軍隊に入る人を、子ども達や町内の人達と一緒に日の丸の小旗を振って氏神様にお参りしてから駅まで見送りました。毎日のように兵隊さんの見送りをするので、自分の仕事はいつも後回しにされ、できませんでした。

私の年代は、小学一・二・五・六年生は学校での集合写真がありますが、三・四年生は住んでいる町が空襲で戦場と同じように攻撃され逃げ回っていたので、写真はありません。六年生の時は一クラス84人が二クラスあって、午前と午後に分れて授業を受けました。

## 食

今も思い出すのは、友達のお父さんは工場木工部なので、一番大きな弁当箱を持って行って、帰りに弁当箱に木を隠して持ち帰りその木で下駄を作り売ったり、農家の人のお米と交換していたのです。このことは当時、履くものも、食べるものも無かった証拠のお話です。お菓子もありません、白いご飯もありません、少しのお米に「さつまいも」や「さつまいものつる」など食べられるものなら何でも入れて「すいとん」のように水を多く入れてすするように食べるのです。さつまいもを粉にして「まんじゅう」を作りましたが砂糖はありません。甘味料はズルチンやサツカリンです。牛肉も豚肉もないのです。子どもが雑草を採ってきて鶏を飼いました。卵は食わずに売ります。肺病の人が多く薬もないので卵は栄養があると、高い値段で売れました。

天白川や扇川の土手を畑にして「さつまいも」「豆」「南瓜」食べられるいろんな野菜を小学生も作りました。タンポポの葉も食べたし、秋に稲穂に集まる「イナゴ」という昆虫も捕まえて食べました。ゴキブリはいませんでした。今のよう

## 住

私の家にも、お友達の家にも、ご近所の家にも家庭用燃料は薪・木炭・練炭などで、ガスはありませんでした。ご飯やお味噌汁、お茶などは「かまど」に「釜」「鍋」などを掛け、薪を燃やすのです。「かまど」の焚口から灰や火の粉が落ちるので台所は「土間」です。今はマッチを知らない子もいると思いますがマッチがないと煮炊きができませんでした。マッチも少なく配給制でした。

水道もありません、井戸のある家と、無い家があり、井戸の無い人達は共同井

戸を使いました。一人一人決められた「お膳」と呼ぶ「箱」を持っていて、お膳には茶碗・お椀・お箸・湯飲みなどマイ食器が入っています。お茶碗は毎日洗いません、食事の終わりにお茶碗にお茶を入れてお茶で汚れを落とし飲みきってお膳にしまします。

洗濯は「たらい」と「洗濯板」を使い手で洗うのです。着替えは毎日でなく一日か二日置きぐらいです。鳴海中学の北側に川があつて、潮見が丘辺りは山で綺麗な水が流れ、緑高校の信号の辺りが洗濯物の洗い場になつて仕事着やオムツなど順番を待つて川の水で洗っていました。お風呂に水を入れるのはバケツで何度も運び、風呂の燃料は薪です。薪を燃やすのには最初によく燃える松葉などを利用します。学校から帰ると子ども達は「熊手」を持って松葉を取りに行きます。風呂の無い人は「銭湯」へお金を払つて行きました。

トイレはポットントイレで、汲み取り式なので家の中になく、家の外に建ててありました。夜中や冬の夜などは起きて行くのが恐いのと、寒いので辛かったです。どの家も畑で野菜を育てていて肥料はポットントイレの人糞でした。

近くの農家から栽培している野菜の肥料用に、人糞を野菜と交換で集めて来ていました。

暖房は火鉢です。形は陶器製の大きな入れ物で中に灰を入れ、木炭や「かまど」で燃やした薪を「火消し壺」で消したのを暖房用燃料に再利用しました。「ゴトク」と呼ぶ鉄の道具の上に「やかん」や「土瓶」を置きお茶やお湯を沸かしました。また「ゴトク」の上に網を置きお餅を焼きました。

夜具に使う暖房は土で作った壺に「豆炭」を入れたり、「湯たんぽ」という陶器製とブリキ製の暖房器は中に熱湯を入れて使いました。冷房は「団扇」だけです。網戸もありません。夏は雨戸も開け放つて家の中を風が通り抜けるように寝ました。人の血を吸う昆虫を防ぐのに「蚊帳」というものを使い、蚩を蚊帳の中に飛ばして楽しみました。

昭和二十年三月頃から空襲が激しくなり、今の緑高校の辺りから六田一丁目辺りまでの家は空襲で燃やされ火の海になりました。本当に恐かったです。私の家は相原郷で空襲の難から逃れることができました。もう二度と戦争はしてはいけないと思います。

# 空襲下交換台を守った女性達

緒川 文子

定年退職する十年前まで私は電話局で働いていました。奉職中に戦争時の先輩たちが命を賭けて通信を守り通した話を思い出しては「美しい国・日本」が戦争の方向へ歯車が回転している危機を感じ、先輩達の戦時体験を語り継いで、平和のお役に立てばと思ひ投稿いたしました。

昭和二十年三月十九日、B29の空襲を受けた市外局は名古屋市の中心街中区伏見にあり、周辺の人達の避難所にもなっていました。一人の女性が窓ガラスを叩いて「主人は軍隊へ行っていない、この子を助けてください」と訴えています。上司はまだ沢山の人が救いを求めているので迷いながらドアを開けて局内に入れましたが、その子の頭は焼夷弾の直撃を受けて穴が開いていました。局の外は内庭にも火の粉が物凄く落ちてきて、局員は外へ逃げ出そうとした時、責任者が「外は危ない、死ぬなら一緒にこの場所で死のう」と叫び、結果的には助かったのです。

電話局の組織は軍隊から命令管理されて、課長は分隊長などと軍隊方式の名称で、職場の中には、消火隊、救護隊、決死隊がありました。空襲になると通信設備が内蔵されている地下室へ避難しますが、交換台を守る決死隊の人達はいかなることがあっても、交換台を離れることはできないのです。

戦場と同じ空襲下の職場、爆弾と焼夷弾がドカンドカンと周囲に落ちている「電話局」で私達の先輩はどんな気持ちで通信を守ったのか。武器や弾薬を造る工場でも空襲になると、持場を放棄して防空壕へ逃げたのに、電話局では『空襲ぐらいで避難するな』の命令で交換台を死守していたのは女性で、多くの市民が空襲に追われ燃えていない校庭や公園、川や橋の下へと逃げている時にも、逃げずに踏み止まっていた壮絶な決死隊の体験談です。

日本の電気通信・電信事業は明治二十三年に三千通足らず、電話事業は東京の加入者155、横浜の加入者42で開始されています。現在、電気通信事業は経済の大動脈として、また、世の中の視神経として欠くべからざる存在になっていますが、電気通信の発展は世界的に見ても軍事との関わりの中で伸張していると言えます。日本においても例外ではなく、歴史的に見ても、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦を経て、日本軍の中国、東南アジア侵略・真珠湾攻撃による全面的な第二次世界大戦に至り国策として更に軍事通信として強化されていきました。この戦争が通信事業に残したものは、国民への犠牲のみならず、大都會を中心

にした大きな被害でした。終戦時、電信局52%、電話局35%、市外回線29%、加入電話42%、公衆電話29%という壊滅的な破壊状況でした。名古屋市も最高35、000加入電話も終戦時には3、202加入に激減したと記述されています。

このように通信網の被害も想像に絶するものもありますが、私達が絶対に忘れることのできないのは、空爆下も通信確保のため必死で作業を続けた人達の命が奪われたことです。安全な場所、防空壕に避難することも許されずに犠牲にされた先輩達の二の舞は、二度とあってはならないことです。

そのためにも憲法九条を守ることが、避難したら助かったのに、避難もできずに死んでいった先輩達への供養になると信じています。

## 激動の少年時代

小寺 秀男

昭和十六年十二月太平洋戦争を始めた時、私は小学校一年生の六才でした。学年とともに戦争が激しくなり、勉強勉強と言う人はいませんでした。毎日のように兵隊さんを送り出すのに有松駅まで、日の丸の小旗を振りながら軍歌を歌って見送りました。

四年生（昭和十九年）頃になると、空襲警戒警報とか空襲警報とかの避難訓練もあり戦争の激しさが小学生にも身近になってきました。その頃、鳴海町有松裏に日本と戦っている敵兵の捕虜收容所ができました。大男の外人の軍団が背の低い日本兵に怒鳴られ、竹刀で叩かれ、毎朝有松駅から貨物列車に押し込められ軍事工場へ送り込まれ、工場で酷使され夕方また貨物列車に押し込められて帰ってきた時には疲れきって、倒れる者が続出し、真夏の暑い日などは二人か三人が死んで帰るものが度々あり、駅のホームに棺桶が何時も準備用意されていました。その情景を毎日夕方になると有松駅まで見に行つたものです。子ども心に、これが戦争かと敵兵の外国人でも可哀想に思っていました。その思いを打ち砕くように十二月十三日、B29爆撃機80機が名古屋を本格的に空襲し、大勢の人が殺され家が燃やされたので、可哀想と思いかけていた敵捕虜達が憎らしくなりました。

大人の人達が、有松は捕虜收容所があるから空襲はされないと話していましたが、昭和二十年三月から空襲が毎週のように続き凄かったです。名古屋の工場地

帯や港湾、商業地帯や住宅地まで攻撃をするようになり、何百機ものB29からの爆弾、焼夷弾が雨のように空から落ちてきて名古屋を火の海と化し、夕方から朝まで休まず攻撃を繰り返していました。有松にも爆弾が落とされ五、六軒が燃えましました。有松の人達は皆リヤカーや乳母車に家財道具を満載し、逃げ惑う姿は必死でした。朝から太陽が見えないほど黒煙が大空を覆い、晴天なのに空は暗く一日中灰が降り続きました。姉の高等女学生は学校から熱田の工場へ学徒動員で働きに行っていました。爆撃され逃げている時に姉の友達に爆弾の破片が刺さり大怪我をしたと、熱田から有松まで命からがら走って逃げてきた恐怖の話をしてくれました。

昭和二十年八月六日運命の日がきました。広島に巨大爆弾が投下され日本中大異変が起こりました。新聞にキノコの様な形の雲の写真が載って、新型爆弾と書いてありました。何でも今までは違った恐るべき力を持った新兵器だと書いてありました。一発の爆弾で大都市広島を壊滅させ、死者八万人、広島が瓦礫の山と化し、黒焦げの死体が転がり、大人も子どもも焼け爛れた姿が新聞写真で報道され、日本中が驚き恐れる日々でした。そして三日後、再び長崎にあのキノコ雲型爆弾が落とされ被害は広島同様数万人の死者、数万人の重軽傷者、キリストで有名な長崎も壊滅的被害を受け、恐ろしいほどの破壊力は子ども心にも身震いするほどでした。やられっぱなしで次は名古屋の番じゃあないかと皆おののき恐怖の毎日、もう有松の捕虜への同情どころではなくなってきました。

八月十五日、ラジオから流れた天皇陛下の玉音放送で日本が負けたのです。大人の人達は皆泣いていた。日本の敗戦を認めた放送で、私たち子どもは本当の意味が分らなかつた。一度も負けたことのない日本国の大敗です。それがどんなものか想像を絶するものだった。その日を境に日本中が変わった。B29が飛んできて空襲警報は出さず、低空飛行に変わった。爆弾も落とさず爆音は大きく「ゆうゆう」と頭上を飛んでいた。

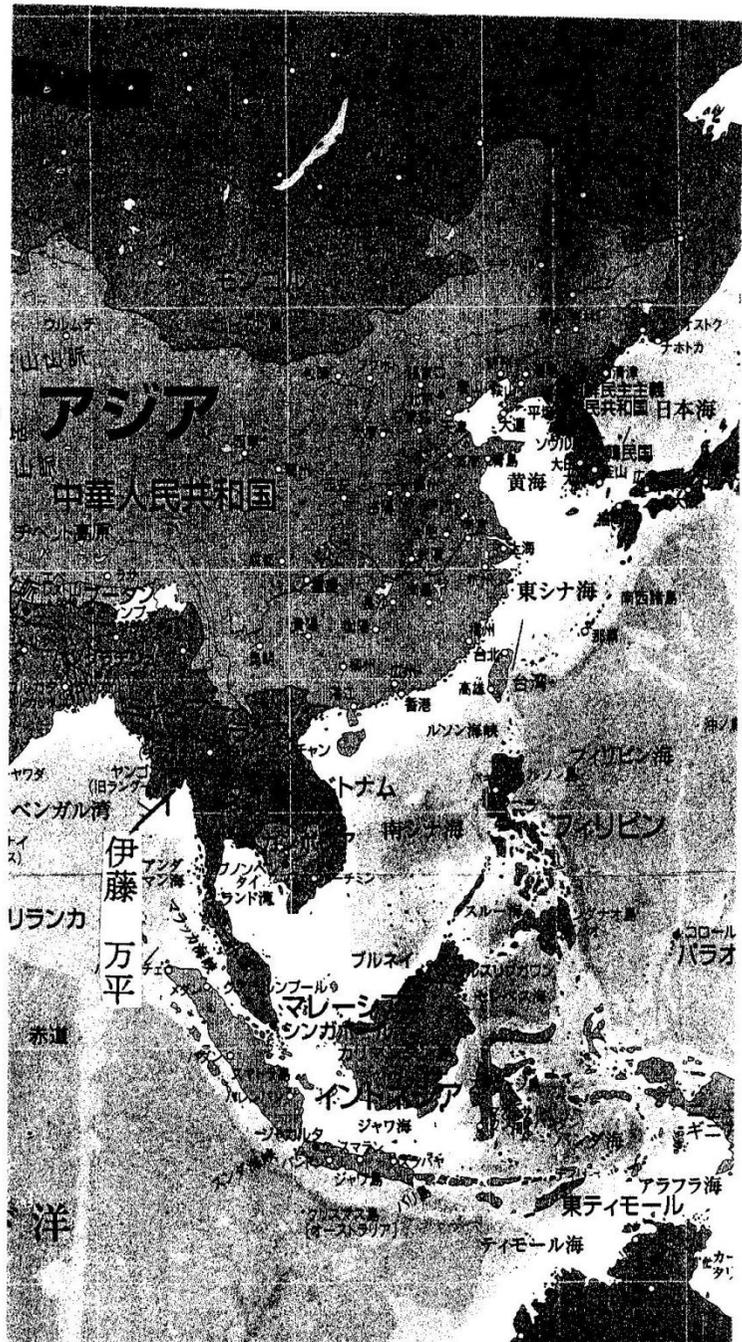
敗戦と同時に一番印象に残ったことは有松の捕虜収容所です。日本が負けたと同時に収容所から大きな歓声が聞こえてきました。丘の上に建つ施設には毎日のように米軍機による空からの物資空輸が始まりました。爆弾の代わりに飛行機の胴体の腹の部分が大きく割れて、そこから爆弾の代わりに荷造りされた梱包がパラシュートで落とされるのです。捕虜達のボロボロの服は全員新品のピカピカに靴もピカピカの新品になり、今までの厳しい生活を強いられていたこれまでの鬱憤を晴らすかの様に、大きな声を張り上げ酔いしれ、始めてみる二メートル近い大男達は白人、黒人、黄色人達は子ども心にも赤鬼、黒鬼、青鬼達が三人、五人とグループで狭い有松の町を悠々と歩き回り我が物顔に闊歩しているように見え

ました。有松町は日が暮れ暗くなったら絶対外出してはいけないと回覧板を回しました。

その内、有松の町並みを散策？する赤鬼、黒鬼、青鬼と子ども達の間にも異変が起きました。鬼達は判らない言葉で子ども達に話しかけ、面白いように子ども達の相手になり遊んでくれたのです。祖国の家族を思い出すかの様に。不思議と怖さはなかったです。その時初めて「チョコレート」「チュウインガム」それに「バナナ」を貰って食べたのです。こんな旨いものがあつたんだ、生まれて始めて食べる珍味？そして知らない内に覚えた「ギブミーチョコ」と騒いだものでした。燕の子が餌を欲しがるように。そして捕虜達もやせ衰えていたのが日増しに血色も良くなり、太っていききました。

米軍機から有松捕虜収容所に落とすパラシュート物資は、時々風のいたずらで収容所の外へも落ちるのです。子ども心に宝物がいっぱい詰め込まれていることを知っているのです。物資めがけて全力疾走し小刀で切り裂き中味を失敬して逃げるスリル。時には見つかり英語で叱られたり、追っかけられたりもしました。あの巨体のB29が低空を飛び、頭上スレスレを行く光景は凄まじいものでした。数日前まではあの巨体の腹から落とされた爆弾で日本を焼け野が原にし、名古屋城までも焼けました。有松の子ども達は巨体から投下される物資めがけて走る、盗む、怪我をしながらも続ける。物資の中にはあの美味しいお菓子が満載されていることを知っているからだ。有松の子ども達の夏休みは、あの美味しいお菓子のために死に物狂いで赤、黒、青の大男の鬼達と想像を絶する争奪戦を展開していたのでした。

《戦争を知って伝える歳になり》 私の少年期の一部です。



# 軍隊五カ月捕虜三年

吉田 勇雄

私は大正十三年生まれ八十三才。高等小学校卒業（現〓中学二年生）満蒙開拓青少年義勇軍に合格満洲へ（現〓中国東北）満洲で徴兵適齢を迎え、第二乙種合格の判定なので現役兵の義務は免れたと思っていたら、昭和二十年三月十五日ハルビン郊外の満州独立輜重兵第五七大隊に現役初年兵として入隊せよとの通知を受ける。（現役兵徴集令状は白紙・補充兵徴集令状は赤紙）

ここで徴兵制を簡単に説明する。女子は兵役の義務も徴兵検査もない。男子は二十才に達すると兵役の義務が生じ、所謂徴兵検査を受ける。検査判定に不合格はなく上位より甲・乙・丙以下と続き、病床で死を待つ徴兵者は丁種合格。健康者は甲種合格と認定され現役兵に採用される。甲種合格者全員兵士にする必要のない平和な時は不採用を選ぶ、選ばれた者は『くじのがれ』と周囲からラッキー坊やとコッソリ祝福された。乙種合格者以下は現役兵にせず補充兵とし必要な時『召集令状〓赤紙』で呼び出す。兵士の数が足らなくなり、甲種より健康度の低い乙種を第一、第二、第三に細分し、第二乙種合格者まで現役兵にした。このようにして第二乙種合格の私も立派な現役兵にされた。

輜重兵は戦闘部隊が必要な武器弾薬、食料等を後方から届ける任務兵なのが入隊と同時に戦闘訓練が始まる。輜重兵の銃は歩兵より十センチ短い騎兵銃で殺傷距離はほぼ百五十メートル、それ以遠三百メートル内は「傷」を負わせる程度だという。教官は大真面目に大声で「敵機B29ボーイング爆撃機は世界一強固な航空機だから正確射撃姿勢で射て」と号令する。一万メートルの成層圏を飛んでいる強固な飛行機にだ。弾が届かないと判っているのに。日本では大真面目に竹槍で敵を倒せと教えていたらしい。

敵戦車攻撃は荷車を敵戦車に見立て、二人が取っ手を持ち荷車を押し出すように全力疾走する、疾走する荷車の下へ十キロ二十キロの土袋を爆薬代わりに、胸に抱いて飛び込む自爆練習を連日繰り返した。ソ連軍の有名な虎戦車は時速六十キロ以上の速度で曠野を走り回るのに、無茶な訓練をするものだった。これも祖国を救う道だと信じ教官の指示通り抵抗もなく、自分が戦死すれば親も小学生の妹も生き延びることが出来るのだと確信して日々訓練に励んだ。

そして八月九日早暁、不可侵条約を無視したソ連軍が満州国に侵攻し輜重第五七大隊も戦闘態勢に入ったが、ソ連軍を見ないまま八月十五日を迎え、一発の弾丸を撃つこともなく降伏した。今思うに国境の守備隊による防戦の結果だと思う。

ソ連軍は日本兵を千名単位で貨車に乗せ、トウキョウダモイ(東京)日本へ帰れる)と東寧からシベリア鉄道に入り、森林伐採などで三年もタダ働きをさせられ、昭和二十三年十月頃体調を崩し働けなくなった。すると酷使され入院している者と一緒に日本へ帰すというのだ。

私は日本を出て六年ぶりに名古屋駅に降り立った、昭和二十三年十一月二十日であった。名古屋は一面の焼け野が原にされて名古屋城も焼失していた。私が戦死したら小学生の妹も生き延びることができると訓練に励んだのに、私の帰る一カ月前に死んでいた。結核で薬もなく。無念落涙。

## 私の青春

伊藤 万平

昭和十七年三月満二十才で静岡県佐久間町で徴兵検査を受け、第二乙種合格。第二補充兵編入となり現役兵を免れたが、同年十二月二十九日召集令状(赤紙)が来る。入隊先は豊橋、工兵第十一部隊へ昭和十八年一月十日午前八時三十分とある。入隊者は静岡、愛知、岐阜の三県から補充兵ばかり。部隊は一中隊静岡、二中隊愛知、三中隊岐阜と同県人編成だ。各班十三〜十五名で初年兵教育。朝食前に「五カ条の御誓文」や「軍人に賜りたる詔勅」を斉唱したり暗唱させられたりで、覚えるのが大変だった。

軍事訓練は歩兵の基礎訓練、小銃の分解手入れや撃ち方を習う。不動姿勢、捧げ銃、担い銃から立撃、膝撃、伏撃、匍匐前進など。工兵だから土方訓練が本業のように加わる、土工、穴掘り、ロープの結び方も数種類、豊橋だから豊川で操舟訓練は二月の真冬で大変だった。鉄の舟を漕ぐ、漕ぎ方が悪いと舟底掃除具で予告なしで尻を殴る、殴られた弾みで川へ飛び出て溺れそうになる。操舟になれどと鉄舟を何艘も河幅一杯に並べ上に板を敷き急造の橋を造る。

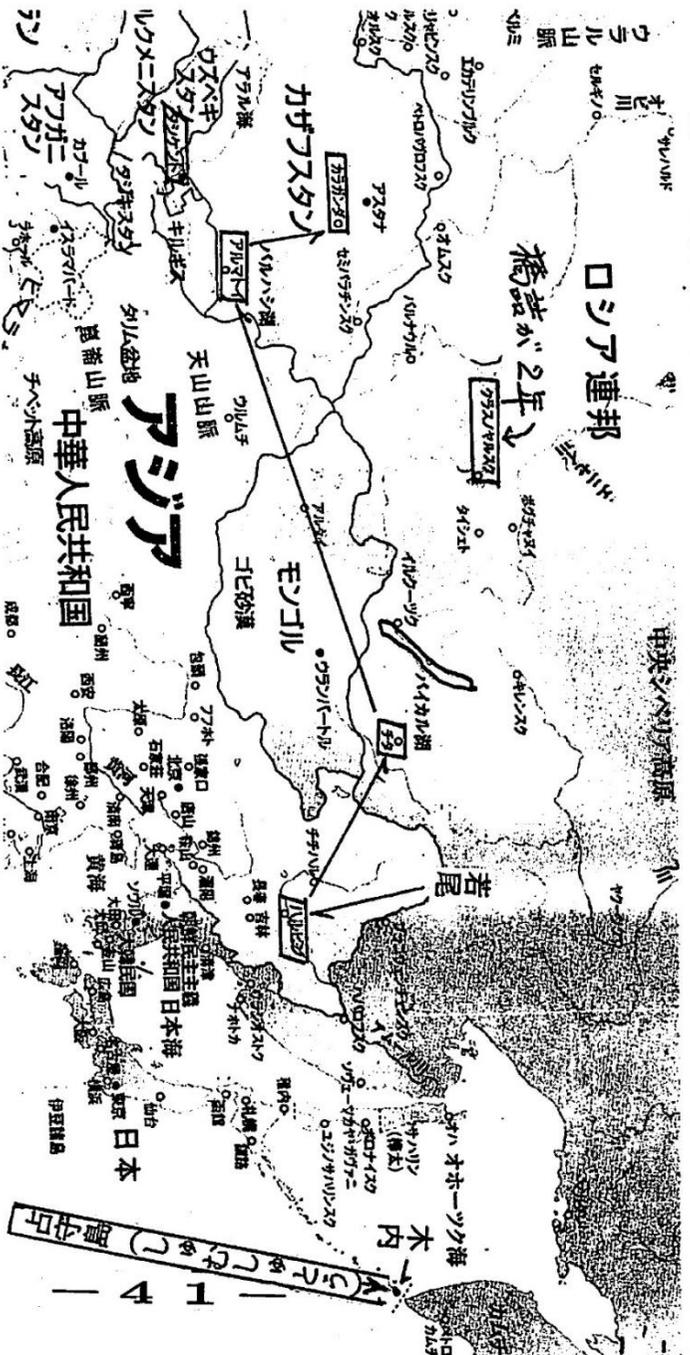
三月になると入隊者が続き兵舎は満員、近くの小学校講堂へ移動し、ろくな訓練も受けず三月二十九日、豊橋市民の日の丸の旗に送られ豊橋駅から宇品港へ向け出発する。四月三十日一万五百屯の貨客船「阿波丸」は航速18ノットの新造船で処女航海なのだ、光栄ある第一航海に乗せてもらったが、行く先は知らされず宇品港を出港する。甲板に出ることを禁じられ祖国の山川の見納めもできない。許されて甲板に出ると長崎沖を航行中だと。船室は二段で下の床に爆弾に装填する瞬発信管や火薬類が積載され船内禁煙なので、できるだけ甲板に居る。台湾が

かすかに見える付近で駆逐艦を発見、敵潜水艦より我々を守っていると聞かされ心強く思う。船はジグザグ航行しながら一路南下。突然非常警報が鳴り響き全員武装して甲板に集合整列、兵士達は撃沈され海に放り出されてもフカ除けの赤禰をしているのだ。見張りが鯨を敵潜水艦と誤認と判明し安心するも、船は敵陣の真っ只中にいるような気持になる。

船はマレー半島に沿い南下、半島先端の昭南島が鮮やかな緑の中に椰子の木も見えるようになる。この島はシンガポールと呼びイギリス領だったが、日本に占領され日本の最南に位置する日本領土で昭南神社も建っていると聞く、緊張の中にも処女航海の雰囲気もあり長くて短い一週間の船旅だった。ここで下船しビルマ行きの船を兵站基地の宿舎で待つことになる。

航海中はスコールの水浴だったので、入浴、洗濯、身辺整理と忙しい。乗船予定は順番制で三カ月先とかで遊ばせてくれない。島の施設や道路整備に毎日出る。ある日ダラダラ作業をしていたら全員整列、足を開き歯を食いしばり、顎を引くと怒鳴られ往復ビンタと一周500メートルの駆け足体罰を食らう。嬉しい外出も街は兵隊がうようよしていて、悲しい星一つの初年兵は敬礼ばかりして歩く始末だ。昭南神社にお参りして帰隊する。

やっと乗船の順番が来てビルマ(現ミャンマー)へ、船は2,000屯の老貨物船に兵士2,000人が乗る。食事は米飯は一日一食と青いバナナ二本の二食。航速6ノットで一時期に流される有様だ。トイレは甲板に海面に落とすように建てられ、強い波が来ると尻が海水に洗われる。昭和十八年七月十六日ラングン(現ミャンゴン)に上陸。兵士達はこれから始まる太平洋戦で一番残酷な、戦わずして雨季、飢、マナリア、アマーバ赤痢、栄養失調、ジャングルに愚弄され死ぬとは誰もが思わなかった。後日整理して発表しよう。



# 雪に埋もれた怨念

木内 久澄

可憐な野花が血に染まり、美しかった海岸線も凄まじい砲火に荒れ果てた。日本国最北端の地「占守島（しゅむしゅとう）」守備隊は北辺の護りとして厳と存在していたが、八月十五日大詔により敵を見ず交戦することもなく降伏だと云うあり得ない立場に立たされ混乱した。神国日本は神風が吹き絶対不敗であると教育され、降伏する時の手順など教わっていないから、自らを武装解除する方法など知るはずもない。日本兵が戦わずして降伏する屈辱の捌け口を探していた十八日、降伏した日本軍がまさか攻撃するとは思わず、ソ連軍が陽気に上陸してきた。負け方を知らぬ日本軍指揮官は、ソ連軍に向かい総攻撃を命令し、不意打ちをくらったソ連軍は全滅に近い状態で退却した。この卑劣な勝利を日本軍指揮官は実力と過信した。あの真珠湾攻撃の時と同じように。態勢を立て直したソ連軍は攻撃をしながら上陸し、日本軍は二回目の降伏をした。国際法を教えられていない日本軍指揮官により、敵も味方も大量の尊い命が無駄死にされた。

九月に入り「日本へ返す」と貨物船に乗せられ一路南下し宗谷海峡を通過、小樽上陸かと思っていたが突然、甲板から全員船内に入れの命令、船室の窓から外を見ることも禁止され、武装したソ連兵が厳しく監視する有様だ。トイレは船底で非衛生のまま船は反転して北上、三昼夜後、北緯五十度のソ連国ソフガワニに上陸。それからはソ連兵を殺したことへの報復かとも思える過酷な強制労働を、ソ連兵に銃口で狙われながらの重労働が三年半も続くのだ。

どこの収容所でも同じと思うが、鉄道建設、荷役、森林伐採、煉瓦工場、建築現場、道路工夫等のタダ働きを、酷寒、飢餓、重労働、虱が媒介する発疹チフス、粗食へ加えての重ノルマの圧力に衰弱死が多数出たなかで、私は三年半持ちこたえた。集団を分散さす方法はノルマが良いからお前とお前は帰すと集め他の収容所へ移動させるのだ。最初は日本へ帰れたと信じていたが二年後に偶然同じ作業所で再会したのだ。このようにして私達の部隊は分散されられていたのだ。

「バターン死の行進」と、戦勝国は非難するが、戦争が終わり世界がソ連が日本が平和になってから、氷点下四十度、五十度の雪原における死の伐採や、その他数々の重労働を世論が取り上げないのが不思議である。広島・長崎は毎年八月になれば取り上げるのに。私は世界が平和になってから発生した「満州邦人棄民扱い」「シベリア抑留」を広島・長崎、に次ぐ悲劇と位置づけるべきと提案する。

# 男狩り

若尾 和延

満州（現中国東北）で働いていた日本人男子はソ連軍の侵攻によりほとんど兵隊にされた。ソ連は兵隊を捕虜にしてシベリアへ連行し、次に兵隊にされなかつた体力の弱い若い男子を「男狩り」して、兵隊と同じように連行し、戦争で疲弊したソ連諸産業の復興を、連行した日本人をタダ働きさせ回復させた。

私は昭和二十年十二月ハルピンで「男狩り」され満州全土からチタに集められた男は千人単位で、全員シャワー中に持参した物を全部略奪され、代わりに薄っぺらなヘンテコな服を着せられアルマテイへ連行された。さらにその奥はタシケントで、天山山脈の雪山が見られる僻地の收容所に入れられた。連行される途中の貨車内で既に発疹チフスが蔓延するなど、不衛生な管理状態なのでこの先が心配された。

收容所のベッドは板張り三段式で毛布が一人一枚。ストーブを焚くと三段目は熱くて裸になり、一段目は毛布二枚でも寒いのだ「熱いからストーブを焚くな」「一段目と交代させるぞ」最初の日から熱い寒いで喧嘩が始まる。食事は少量で粗悪だから全員飢餓状態で、夢遊病者の足取りで製粉工場でノルマに追いかけられ働く、足場が崩れ転落し骨折する。もちろん薬などない。傷の手当は三日に一回包帯代わりの布を巻き替えるだけの治療。

突然移動だと言われ栄養失調患者と一緒に、私は担架のまま貨車へ、内心帰れるかもと喜んでいたらカラガンダで降ろされた。辛抱も忍耐も限界なので通訳を通し改善を要求すると「お前達は戦争に負けた国民だ、しかも資本家の手先になつて中国を侵略し、中国人民を搾取した極悪人だ。資本家の番犬を保護する責任はソビエイトにはない。お前達は自分の所属を証明する名簿すららないではないか、お前達の生死は我々の関知するところではない。」と。一般人を逮捕でなく拉致し自国の戦後復興に働かせ、中国人民を日本帝国主義から解放した救世主はソ同盟であると宣伝し、日本国民の非戦闘員を何万と拉致し、非人間的な扱いで強制労働をさせたことを、世界の人々は知っているのかと言いたい。病気になるれば治療もなく死を待つだけだ。ロウソクの火が消えるように死へ直行だ。私は妻と三人の子、年若い母、兄弟のいる日本へ帰りたい一心で生き残るためにあらゆる努力をした。「若尾は豚も食わぬ草を食べている、畜生以下に成り下がった奴」だと、冷笑した人は栄養失調で死んでしまった。自然の恵みは実に有難いもので春から夏にかけて萌え出る若草には生きる魔力が蓄えられている。自然の栄養があるの

に感謝の念を捧げたものでした。本当にあの時は生き残るために燃えに燃え、苦しんだ時でした。

シベリア抑留、兵隊だけでなく一般市民がソ連の戦後復興のため「男狩り」され、中央アジアで大勢死んでいったことを知って頂きたい。最近、戦争をしたがる人がいるようだが、負ければ私のようにされることを承知して、賛成すべきだ。私は、勿論二度と御免です。

#### 編集後記

『祖父母達の太平洋戦争』の聞き取り体験集だけでなく、愛知県東郷町立諸輪中学校生徒の皆さんから今年も「聞き取り談」の発表もいただきました。

諸輪中学には、戦時体験記録集、第十集・第十二集・第十三集にも先輩達が綴ってくれております。長きにわたりご指導いただいた学校関係者と保護者の皆様に謝意を申し上げます。

また、戦争を体験された諸氏からは、北方からの、南方からの  
実体験記。

この愛知県下で、前線の戦線よりも恐怖の空襲体験談を寄せて  
いただいております。

今年は戦争のできない日本国憲法施行六十年目の節目に当たり  
憲法を改正しようとおります。ご投稿の皆様は異口同音に戦争  
は『二度と御免』と訴えていらっしやいます。

この記録集が一人でも多くの人に回し読みされますように。

#### 戦時体験記録集（十四集）

編集・印刷・発行 ..... 戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日 ..... 平成十九年七月二十八日

発行部数 ..... 百五十部